書式 A（WORD）

【提出期限：2023 年 6 月 30 日】

提出日：2023 年 6 月 30 日

提出者：人間科学研究所長・矢藤　優子

2022 年度　研究所事業報告書

研究所名	人間科学研究所

Ⅰ．研究成果の概要（公開項目）　※1ページ以内にまとめること

本欄には、研究所・センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、研究所総合計画(5 ヵ年)および 2022 年度重点プロジェクト申請調書に記載した内容に照らし、項目立てなどをおこないできるだけわかりやすく記述してください。なお、2022 年度に採択を受けた研究所重点プロジェクトの実績報告は、書式 B に記述のうえ提出してください。

１．重点プロジェクトの推進

以下の 3 課題を重点プロジェクトとし、第 4 期拠点形成型 R-GIRO 研究プログラムの研究プロジェクト「高齢者の認知的コミュニケーションの支援に向けた学際的研究拠点の形成」と連携を行いつつ、研究展開を行った。下記にサブ・プロジェクトを組み込んだ研究プロジェクトを実施し、多彩な活動が展開された。特筆すべき成果・取り組みは以下の通りである。

(1)「法と対人援助」：①司法取引制度に関する研究で科研費基盤（B）が採択され、外部資金獲得という目標が一つ達成された。同テーマに関する心理学実験を複数回実施して基礎的なデータを取得し，共同研究者らと学会での WS を企画・発表した。②VR シミュレート証言研究で比較実験を行い，HMD での提示方法の検討を行った。③刑事事件に関わる供述調書や公判調書をテキストマイニングの手法を使って分析する調書分析や法廷での証言、各種刑事事件の供述に対する心理学分析に関する書籍論文の刊行、法科学のガイドラインや提言に関する文書翻訳を行った。④児童養護施設入所児童の権利擁護について検討し、日本子ども虐待防止学会でシンポジウム開催とポスター報告を行った。「産む家族」を構築した者へのアフターケアを有園博子基金の助成を受け研究計画を変更しながらも継続中。⑤5 つの柱領域で多面的な検討をすすめるとともに、生殖をめぐるインクルーシブな医療・社会サービスの課題についての理論的、実証的検討をすすめた。性と生殖に関わる社会政策・制度に関する研究会を 2023 年 2 月に実施、また新たな柱領域として、地域健康社会学研究センター主催の 3 回にわたる研究会の企画運営に協力。2023 年 2-3 月に同センターが主催する地域医療に関わるシンポジウムを共催して運営にあたった。⑥虐待と DV 問題の危機的増加に対応すべく家族支援の新しい展開をささえる総合的な研究を展開した。フランス・リヨン市での「法と精神衛生に関する国際学会」の治療的司法部門で成果発表、日本社会病理学会、法と心理学会、嗜癖行動学会など関連学会で報告した。

(2)「対人援助の学融的研究」：①質的研究法 TEA/TEM 関する研究を推進し成果発信を積極的に行った。②高齢者プロジェクトの成果に関わって，2 本の論文を公刊した。③胎児期から幼児期までの子どもとその養育者の well-being に関する縦断的研究「いばらきコホート」を遂行した。行動観察のデータを分析し，学会発表と論文投稿を進めた。新たに DeepLabCut を用いて身体運動を深層学習により分析し，その特徴と他の指標との関連について分析した。④自然体験活動・引率の経験者と非経験者（初心者）に対して，自然体験活動場面での危険予測時の視線移動を計測した。⑤質的研究： TEA と質的探究学会を設立、災害復興：双葉町のフィールドワーク、楢葉町で活動する本学出身者への調査、日本心理学会百年史、日本質的心理学会二十年史の編纂に協力し資料収集・編集、産学官連携：企業との共同研究や立命館小学校での知覚心理学展示を実施、法と心理学：現役裁判官が裁判官役を務める模擬裁判のデータ分析を実施した。⑤「PLAN 75」上映会＆トークイベント・プロジェクトを共催（2022 年 12 月 23 日：ハイブリッド開催）。手話通訳と文字通訳の情報保障により見える化して実施。200 名を超える参加者を集め、活発な討議と質疑応答を行った。⑥人と動物の QOL 向上について、行動的 QOL の観点から研究を実施した。人を対象とする実践研究を学会にて報告した。

(3)「対人援助研究のフロンティア」：①「男性介護者と支援者の全国ネットワーク」「京都ケアラーネットワーク」を研究カウンターパートとして、公開学習会の開催やネットワークを形成した。②文脈的行動科学（CBS）に関連する研究として，関係フレーム理論に関する実験的研究とアクセプタンス＆コミットメント・セラピー（ACT）に関する臨床的研究を行った。③自閉スペクトラム症児対象の遊びを中心とする療育プログラム開発(通称あひるくらぶ)の活動を毎月 1 回実施し、併行して親の会活動も実施した。大阪いばらきキャンパスに移行し、新たな展開を行った。④脳卒中による身体障碍への支援に関連して、質的研究を 1 例報告として科学的なエビデンスにする理論枠組みとしての N-of-1 研究の手法についての総説を日本リハビリテーション学会の学会誌に発表した。⑤VR 体験時の重さ錯覚について研究を行い、環境変化での差異を確認した。⑥人工知能による意思決定について、ロボットに対する恐怖心の要因の検討，リアリティの高いロボットを用いた検討，人工知能に対する実験参加者の知識・理解度に関する検討を行った。⑦TFT（Thought Field Therapy: 思考場療法）に関する海外における実証研究論文をレビューし国内外に紹介するため、研究の変遷をまとめた。⑧認知症者への対話の場を提供するシステムを提案することを目指し，ロボットやソフトウェアエージェントを用いた対話システムに関する研究や GPT-2 を用いた発話生成モデルを構築した。⑨人の記憶に関する研究を行い、作動記憶の更新にともなう忘却に関する実験を行い、日本認知心理学会大会において発表を行った。⑩18 歳以降のケアの継続に焦点をあてて、当事者参加型アクションリサーチを行った。日本財団による助成を受けて、子ども・若者ケアラー支援にかかわる社会資源の開発に着手した。

2．学術誌の刊行と研究所年次総会での研究成果の公開

・査読論文を中心とする『立命館人間科学研究』を 3 号刊行した。

・研究所年次総会では「20 年を迎えた TEA（複線径路等至性アプローチ）―その広がりと可能性」が企画・開催された。TEA という質的研究法は、2004 年 1 月に産声をあげ、その誕生にかかわるシンポジウムもまた 2004 年 1 月に当研究所の主催により開催されている。人間科学研究所には多学問領域にて質的研究法として用いられている TEA を 20 年かけてひとつの研究法に育てる豊かな基盤があることを特記しておく。

3．若手研究者の育成

・各プロジェクトを通して若手研究者主導による実験研究の促進、共同報告や共同執筆、教職協働への参画、社会人大学生の博士号取得や学会での表彰など幅広い成果が見られた。

・当研究所所属院生の複数名が日本学術振興会特別研究員に採択、参加研究員が駿河台大学の准教授として就職、科学捜査研究所への就職、R-GIRO 専門研究員が京都大学の常勤ポストに採用されるなどした。また、所属院生や研究生が公認心理師・臨床心理士資格の取得を果たした。

・今年度も若手研究者を所内重点・萌芽プロジェクトメンバーとし、創思館に現有するプロジェクト室を提供するなど、研究資源の配分を積極的に行うとともに研究上の連携を奨励した。

4．その他研究の展開

・JST−RISTEX 「科学技術の倫理的・法制度的・社会的課題（ELSI）への包括的実践研究開発プログラム」 に申請した。結果、不採択であったが、23 年度も内容を精査し再度申請を行う予定である。

・社会技術研究開発事業 研究開発プロジェクト SOLVE-社会的孤立枠（研究課題名「「18 歳の崖」以降の生活環境デザインの構築」）や、科学研究費補助金 基盤研究（A）（研究課題名「ポストコロナ社会における養育者と子どもの well-being 増進に向けた領域架橋的研究」）へ申請した。結果は不採択であったが、外部資金獲得に向けて果敢な取り組みを継続的に行っている。

・社会的要請に直接対応する事業を以下のように展開した。①日本財団助成金を受け、高度専門職養成に向けて実施している「フォスタリング・ソーシャルワーク専門職講座」を開講し、4 期生 12 名が修了した（2023 年度まで実施予定）。②京都府委託事業として、男性問題にかかわる専門相談員による DV 加害者更生カウンセリングを実施した。③日本財団による助成を受け、子ども・若者ケアラー支援にかかわる社会資源の開発に着手した。宿泊付きキャンプ事業（ケアラーの余暇活動、親・家族との物理的距離化）、当事者とともに考える専門職養成講座、就活支援企画などを行った。

Ⅱ．拠点構成員の一覧（公開項目）※ページ数の制限は無し

本欄には、2023 年 3 月 31 日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員協力研究員等の構成員を全て記載してください。区分が重複する場合は二重に記入せず、役割が上にあるものから優先し全て記載してください。また、若手研究者の条件に当てはまる場合は、若手研究者欄に記載をしてください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③大学院生、④日本学術振興会特別研究員（PD・RPD）

役割	氏名	所属	職位
研究所長・センター長	矢藤　優子	総合心理学部	教授
運営委員	若林 宏輔	総合心理学部	准教授
	稲葉 光行	政策科学部	教授
	石田 賀奈子	産業社会学部	准教授
	松田 亮三	産業社会学部	教授
	中村 正	産業社会学部・人間科学研究科	教授
	安田 裕子	総合心理学部	教授
	土田 宣明	総合心理学部	教授
	岡本 尚子	産業社会学部	准教授
	サトウ タツヤ	総合心理学部	教授
	大谷 いづみ	産業社会学部	教授
	中鹿 直樹	総合心理学部	准教授
	林 勇吾	総合心理学部	教授
	竹内 謙彰	産業社会学部	教授
	谷 晋二	総合心理学部	教授
	泉 朋子	情報理工学部	准教授
	美馬 達哉	先端総合学術研究科	教授

	御旅屋 達	産業社会学部	准教授
	星野 祐司	総合心理学部	教授
	岡本 直子	総合心理学部	教授
	木村 朝子	情報理工学部	教授
	斎藤 真緒	産業社会学部	教授
学内教員 （専任教員、研究系教員等）	岡田 まり	産業社会学部	教授
	早川 岳人	衣笠総合研究機構	教授
	村本 邦子	人間科学研究科	教授
	徳永 祥子	衣笠総合研究機構	准教授
	北出 慶子	文学部	教授
	斎藤 進也	映像学部	准教授
	山浦 一保	ｽﾎﾟｰﾂ健康科学部	教授
	堀江 未来	国際教育推進機構	教授
	山口 洋典	共通教育推進機構	教授
	北川 智利	BKC 総合研究機構	教授
	高橋 康介	総合心理学部教授	教授
	永井 聖剛	総合心理学部教授	教授
	和田 有史	食マネジメント学部	教授
	南 博文	OIC 総合研究機構	教授
	神崎 真実	立命館ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ研究機構	助教
	川端 美季	衣笠総合研究機構	准教授
	古野 公紀	総合心理学部	特任助教
	濱田 大佐	立命館ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ研究機構	助教
	森岡 正芳	総合心理学部	教授
	清家 理	スポーツ健康科学部	教授
	西原 陽子	情報理工学部	教授
	大津 耕陽	情報理工学部	助教
	山岸 典子	グローバル教養学部	教授
	姫野 有紀子	生命科学部	助教
	津止 正敏	産業社会学部	特任教授
	柴田 史久	情報理工学部	教授
	松室 美紀	情報理工学部	助教
	Christian Arzate Cruz	立命館ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ研究機構	研究助教
学内の若手研究者 ① 専門研究員 研究員 初任研究員	中田 友貴	立命館ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ・ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ研究機構	専門研究員
	森田 磨里絵	BKC 社系研究機構	専門研究員
	山田 早紀	衣笠総合研究機構	研究員
	坂井 めぐみ	衣笠総合研究機構	専門研究員
	シン・ジュヒョン	衣笠総合研究機構	専門研究員

		村上 崇史	立命館ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ･ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ研究機構	専門研究員
		安藤 雅行	立命館ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ･ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝ研究機構	専門研究員
	② リサーチアシスタント			
	③ 大学院生	リュウ・タクウ(LIU Zeyu)	人間科学研究科	博士課程前期課程
		水野 亮太	人間科学研究科	博士課程前期課程
		藤本 和希	人間科学研究科	博士課程前期課程
		中島 佑里子	人間科学研究科	博士課程前期課程
		杉本 菜月	人間科学研究科	博士課程前期課程
		ホウ ギョウウ	社会学研究科	博士課程前期課程
		横山 達彦	社会学研究科	博士課程前期課程
		WANG Yuzhu	社会学研究科	博士課程前期課程
		相馬 才乃	社会学研究科	博士課程前期課程
		廣田 貴也	人間科学研究科	博士課程後期課程
		武田 悠衣	人間科学研究科	博士課程後期課程
		木村 祐子	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
		井上 智恵	社会学研究科	博士課程後期課程
		宮宇 地雄介	社会学研究科	博士課程後期課程
		市川 岳仁	人間科学研究科	博士課程後期課程
		村山 珪子	人間科学研究科	博士課程後期課程
		天野 諭	人間科学研究科	博士課程後期課程
		安發 明子	人間科学研究科	博士課程後期課程
		工藤 芳幸	人間科学研究科	博士課程後期課程
		張 秋陽	人間科学研究科	博士課程後期課程
		松本 健輔	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
		木村 駿斗	人間科学研究科	博士課程前期課程
		山口 祐司	人間科学研究科	博士課程前期課程
		小林 藍	人間科学研究科	博士課程前期課程
		近江 涼音	人間科学研究科	博士課程前期課程
		堀江 喜久子	人間科学研究科	博士課程前期課程
		杉本 菜月	人間科学研究科	博士課程前期課程
		新屋 陽子	人間科学研究科	博士課程前期課程
		齋藤 優希	人間科学研究科	博士課程前期課程
		石井 大成	人間科学研究科	博士課程前期課程
		中原 京子	社会学研究科	博士課程前期課程
		松山 浩太朗	社会学研究科	博士課程前期課程
		大月 隆生	社会学研究科	博士課程前期課程
		服部 虎太郎	人間科学研究科	博士課程前期課程
		穴穂 優季	人間科学研究科	博士課程前期課程

		戸名 久美子	人間科学研究科	博士課程後期課程
		安井 美鈴	人間科学研究科	博士課程後期課程
		河上 実樹	人間科学研究科	博士課程後期課程
		連 傑濤	人間科学研究科	博士課程後期課程
		福山 未智	人間科学研究科	博士課程後期課程
		中井 良平	先端総合学術研究科	博士課程後期課程
		高 雅郁	先端総合学術研究科	博士課程後期課程
		ユ・ジンギョン	先端総合学術研究科	博士課程後期課程
		安田 智博	先端総合学術研究科	博士課程後期課程
		高山 仁志	人間科学研究科	博士課程後期課程
		渡辺 咲花	人間科学研究科	博士課程前期課程
		吉田 崇裕	人間科学研究科	博士課程前期課程
		服部 虎太郎	人間科学研究科	博士課程前期課程
		八田 知哉	人間科学研究科	博士課程前期課程
		陣内 里紗	人間科学研究科	博士課程前期課程
		浅野 史奈	人間科学研究科	博士課程前期課程
		松村 奈津	人間科学研究科	博士課程前期課程
		蓼沼 力	人間科学研究科	博士課程前期課程
		近江 涼音	人間科学研究科	博士課程前期課程
		小林 藍	人間科学研究科	博士課程前期課程
		穴穂 優季	人間科学研究科	博士課程前期課程
		石田 美咲紀	人間科学研究科	博士課程前期課程
		肩野 礼華	人間科学研究科	博士課程前期課程
		香月 みかん	人間科学研究科	博士課程前期課程
		金居 みずき	人間科学研究科	博士課程前期課程
		西尾 綾華	人間科学研究科	博士課程前期課程
		服部 繭子	人間科学研究科	博士課程前期課程
		松尾 早紀子	人間科学研究科	博士課程前期課程
		水川 早紀	人間科学研究科	博士課程前期課程
		向井 直史	人間科学研究科	博士課程前期課程
		柳井 有加里	人間科学研究科	博士課程前期課程
		金谷 伶菜	人間科学研究科	博士課程前期課程
		川村 涼夏	人間科学研究科	博士課程前期課程
		尾﨑 文音	人間科学研究科	博士課程前期課程
		福田 長子	人間科学研究科	博士課程前期課程
		藤本 和希	人間科学研究科	博士課程前期課程
		松村 美和	人間科学研究科	博士課程前期課程
		石黒 和	人間科学研究科	博士課程前期課程
		串上 友里恵	人間科学研究科	博士課程前期課程
		末永 大清	人間科学研究科	博士課程前期課程
		上田 椰馬	情報理工学部	博士課程前期課程
		浦野 雅也	情報理工学部	博士課程前期課程

	岡松 育夢	情報理工学部	博士課程前期課程
	田付 航	情報理工学部	博士課程前期課程
	辻 勇太	情報理工学部	博士課程前期課程
	夏目 達也	情報理工学部	博士課程前期課程
	萩原 息吹	情報理工学部	博士課程前期課程
	江波戸 傑	情報理工学部	博士課程前期課程
	永留 菜花	情報理工学部	博士課程前期課程
	中村 仁一朗	情報理工学部	博士課程前期課程
	中村 哲朗	情報理工学部	博士課程前期課程
	野﨑 颯人	情報理工学部	博士課程前期課程
	林 真平	情報理工学部	博士課程前期課程
	林 佑一	情報理工学部	博士課程前期課程
	和田 洸一	情報理工学部	博士課程前期課程
	河西 優	社会学研究科	博士課程前期課程
	大月 隆生	社会学研究科	博士課程前期課程
	湯谷 菜王子	社会学研究科	博士課程前期課程
	德竹 綾香	社会学研究科	博士課程前期課程
	伊藤 保子	社会学研究科	博士課程前期課程
	サイ・シコウ	社会学研究科	博士課程前期課程
	下條 志厳	人間科学研究科	博士課程後期課程
	安陪 梨沙	人間科学研究科	博士課程後期課程
	松元 佑	社会学研究科	博士課程後期課程
	富井 奈菜実	社会学研究科	博士課程後期課程
	目黒 朋	社会学研究科	博士課程後期課程
	近藤 優佳	人間科学研究科	博士課程後期課程
	Zhang Pin	人間科学研究科	博士課程後期課程
	Li Sheng	人間科学研究科	博士課程後期課程
	紺田 真穂	人間科学研究科	博士課程後期課程
	Tao Orin	人間科学研究科	博士課程後期課程
	平松 祐佳	人間科学研究科	博士課程後期課程
	仲上 恭子	人間科学研究科	博士課程後期課程
	高木 美歩	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	柏崎 郁子	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	田中 美穂	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	川崎 雅貴	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	船曳 美千子	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	忠岡 経子	先端総合学術研究科	一貫制博士課程
	佐藤 文紀	人間科学研究科	博士課程後期課程
	銭 宝怡	人間科学研究科	博士課程後期課程
	坂口 龍也	人間科学研究科	博士課程後期課程
④ 日本学術振興会特別研究員(PD・RPD)	高橋 康史	南山大学	講師
	西井 開	千葉大学	学振特別研究員

その他の学内者 （補助研究員、非常勤講師、研究生、研修生等）	森井 花音	人間科学研究科	博士課程前期課程（研修生）
	尾﨑 怜子	人間科学研究科	博士課程前期課程（研修生）
	水月 昭道	総合心理学部	訪問教授
	荒木 穂積	人間科学研究科	授業担当講師
	市原 瑞士	情報理工学部	4 回生
	内田 圭祐	情報理工学部	4 回生
	狩山 大治	情報理工学部	4 回生
	近藤 翔太	情報理工学部	4 回生
	羽田野 将大	情報理工学部	4 回生
	早川 魁人	情報理工学部	4 回生
	樋口 雄大	情報理工学部	4 回生
	藤原 侑史	情報理工学部	4 回生
	松下 彩夏	情報理工学部	4 回生
	武石 卓也	衣笠リサーチオフィス	非常勤職員
客員協力研究員	浅田 和茂	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員（特別研究フェロー）
	浜田 寿美男	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員（上席研究員）
	平岡 義博	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員（上席研究員）
	笹倉 佳奈	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	知花 鷹一朗	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	川﨑 拓也	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	和食 慶江	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	坪倉 浩美	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	大澤 ちひろ	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	松島 京	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	由井 秀樹	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	村上 慎司	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員

	棟居 徳子	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	高山 一夫	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	大倉 和子	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	金森 京子	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	江頭 典江	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	西沢 いづみ	衣笠総合研究機構　地域健康社会学研究センター	客員協力研究員
	千葉 晃央	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	荒木 晃子	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	三品 拓人	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	土元 哲平	OIC 総合研究機構 ものづくり質的研究センター	客員協力研究員
	吉田 甫	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	石川 眞理子	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	高橋 伸子	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	Barratt,Peg.	OIC 総合研究機構	客員協力研究員
	山﨑 まどか	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	黒田 恭史	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	土田 菜穂	OIC 総合研究機構	客員協力研究員
	手島 洋	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	大原 ゆい	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	大野 静代	衣笠総合研究機構　人間科学研究所	客員協力研究員
	都賀 美有紀	OIC 総合研究機構	客員協力研究員
その他の学外者	山崎 優子	駿河台大学	准教授
	野崎 祐人	京都大学大学院人間環境学研究科	博士課程後期課程
	高橋 康史	南山大学	講師

	川島 康史	（一社）日本男性相談フォーラム	相談員
	妹尾 麻美	追手門学院大学	准教授
	坂田 陽子	愛知淑徳大学	教授
	春日 彩花	大阪大学	助教
	孫 怡	アジア日本研究機構	研究教員
	李 星鎬	アジア・日本研究機構	客員研究員
	川本 静香	山梨大学教育学部附属教育実践総合センター	准教授
	安 孝淑	韓国 ALS 協会	理事
	荒木 美知子	龍谷大学社会学部現代福祉学科	教授
	後藤 健志	国立民族学博物館	外来研究員
	西田 朗子	東亜大学	准教授
	與久田 巌	奈良大学社会学部	教授
	平井 登威	関西大学社会安全学部	2 回生
	亀山 裕樹	北海道大学	博士課程前期課程
	山村 和恵	立命館守山中学・高校	養護教諭
研究所等構成員　　計 241 名　（うち学内の若手研究者　計　126 名）			

Ⅲ. 研究業績（公開項目）　※ページ数の制限は無し ※to be published,の状態の業績は記載しないで下さい。

本欄には、「Ⅱ．拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。(2023 年 3 月 31 日時点)
また、書式 B の研究業績欄との二重記載をお願いいたします。

1．著書

No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1.	稲葉　光行	Grounded Text Mining Approach: An Integration Strategy of Grounded Theory and Textual Data Mining	共著	2023 年	SAGE	Hisako Kakai	
2.	稲葉　光行	Promoting Social Justice with Grounded Theory: Applying the Grounded Text Mining Approach to Deposition Analyses	共著	2022 年 11 月	Festschrift in Honour of Kathy Charmaz　56	Kakai, Hisako Inaba, Mitsuyuki	PP.　37～46
3.	中村　正	『どうして男はこうなんだろうか会議』の第 3 章「男性性と暴力ーコミュニケーションに潜む加害と被害の両面から考えるー」	共著	2022 年 8 月	筑摩書房	澁谷知美・清田隆之編/西井開・中村正・平山亮・前川直哉・武田砂鉄	PP.　101～137
4.	中村　正	『災厄を生きるー物語と土地の力』	共著	2022 年 7 月	国書刊行会		PP.　229～258
5.	中村　正	マスキュリニティーズー男性性の社会科学ー	共訳	2022 年 5 月	新曜社	伊藤公雄訳／中村正・多賀太らと共同訳	
6.	村本　邦子	戦争と文化的トラウマー日本における第二次世界大戦の長期的影響	分担執筆	2023 年 4 月	日本評論社		PP.　219～231

7.	村本　邦子	災厄を生きる―東日本大震災からコロナ禍まで　物語と土地の力	編者	2022 年 7 月	国書刊行会		
8.	安田　裕子	カタログ TEA―図で響きあう	共著	2023 年 2 月	新曜社	サトウタツヤ他	PP. 76～90 PP. 91～99
9.	安田　裕子	司法的な見方	共著	2022 年 6 月	ちとせプレス	司法面接研究会（編）	PP. 27～49
10.	矢藤　優子	現代中国の子育てと教育―発達心理学から見た課題と未来展望	共編者	2023 年 3 月	ナカニシヤ出版	矢藤優子・吉沅洪・孫怡（編著） 連傑濤・姜娜・姜露・劉妮・陳婷婷・唐妍・盧中潔（著）	
11.	矢藤　優子	児童心理学・発達科学ハンドブック第3巻　社会情動の過程　6 章「関係性、制御、そして初期発達」	共訳	2022 年 9 月	福村出版	二宮　克美 監訳 子安　増生 監訳 河合　優年 編訳 服部　環 編訳 郷式　徹 編訳 山　祐嗣 編訳 小塩　真司 編訳 仲　真紀子 編訳 根ケ山　光一 編訳 氏家　達夫 編訳	6 章「関係性、制御、そして初期発達」
12.	サトウ タツヤ	Sayonara Variable, Konnichiwa Equifinality Point: Semiotic Cultural Psychology Teaches Us What Colorful Really Means	共著	2023 年 4 月	Information Age Publishing	◎Tatsuya Sato, Yuko Yasuda, Misato Fukuyama, Daina Ishii, Ayae Kido, Yasuhiro Omi, and Yoshiyuki Watanabe	
13.	サトウ タツヤ	心理学からみた評議の会話分析研究	単著	2023 年 3 月	日本評論社		
14.	サトウ タツヤ	カタログ TEA	共編者	2023 年 2 月	新曜社	サトウタツヤ・安田裕子（監修）	
15.	サトウ タツヤ	TEA as a Proposal for Translation Between an Idiographic Approach and Nomothetic Approach,	共著	2023 年 1 月	Information Age Publishing	Tatsuya Sato and Misato Fukuyama	
16.	サトウ タツヤ	心理検査マッピング―全体像をつかみ、臨床に活かす	共編者	2022 年 9 月	新曜社	鈴木朋子・サトウタツヤ	
17.	サトウ タツヤ	流れを読む心理学史　補訂版	共著	2022 年 5 月	有斐閣	サトウタツヤ・高砂美樹	第 3 章、第 4 章、第 5 章、終章
18.	北出　慶子	Chapter title: “No Need to Invest in the Japanese Language?”: The Identity Development of Chinese Students in the English-Medium Instruction (EMI) Program of a Japanese College.	分担執筆	2023 年 3 月	Palgrave Macmillan	In: Mielick, M., Kubota, R., Lawrence, L. (eds)	
19.	山浦　一保	組織文化と理念の浸透・教育と従業員の心／組織心理学の観点から	共著	2022 年 9 月	立命館大学稲盛経営哲学研究センター	山浦一保・サトウタツヤ・河野達仁・河井 亨	PP. 30～37
20.	山浦　一保	『心理的安全性の築き方 見るだけノート』	監修	2022 年 8 月	宝島社		
21.	山浦　一保	『2050 年のスポーツースポーツが変わる未来／変える未来―』 第 2 章 DX とスポーツ組織、ひと、社会	共著	2022 年 6 月	晃洋書房	山浦一保　一般社団法人スポーツと都市協議会(監修)、伊坂忠夫・花内 誠(編著)	PP. 17～34
22.	堀江　未来	Mestenhauser and the Possibilities of International Education: Illuminating Pathways for Inquiry and Future Practice	共著	2022 年 7 月	Rougledge	Anne M. D'Angelo, Mary Katherine O'Brien, Gayla Marty (Eds)	PP. 120～126

23.	堀江　未来	世界とつながる科学教育：高校生サイエンスフェアを通して理系グローバル人材を育てる	分担執筆	2022 年 3 月	学文社	田中博・堀江未来・武田菜々子・半田享・松浦紀之	第 2 章　グローバル人材を育てるサイエンス・フェア：多文化間共修論から考える
24.	山口　洋典	「まちづくりの学を求めて」『ギブ&ギブ、おせっかいのすすめ　＝Let's Give it a Try＝　―鳥取県智頭町　地域からの挑戦―』	監修	2022 年 6 月	今井出版	寺谷 篤志（編著）、吉永 崇史（考察）、木田 悟史（書評＜書籍内所収＞）、山口 洋典（監修）	PP. 245～259
25.	永井　聖剛	心理物理計測法Ⅱ，図説 視覚の事典（日本視覚学会(編集)）	分担執筆	2022年11月	朝倉書店		
26.	和田　有史	視覚と食品の認知	分担執筆	2022年11月	朝倉書店		5.4　他感覚認知
27.	和田　有史	味以外のおいしさの科学第一節：視覚と食品の状態変化　視覚と食品の状態評価	共著	2022年11月	㈱エヌ・ティー・エス	和田有史・松原和也	PP. 3～10
28.	大谷　いづみ	『良い死／唯の生』		2022　年 12 月	筑摩書房	立岩真也著	「解説　それぞれの「良い死／唯の生」
29.	泉　朋子	Systems Design Based on the Benefits of Inconvenience	単著	2023 年 3 月	Translational Systems Sciences, Springer	Hiroshi Kawakami (Ed.), Tomoko Izumi et al.	Chapter 7 Tourism Engineering for Support Stroll – What Is True Travel?-
30.	清家　理	Extracting multiple layers of social networks through a 7-month survey using a wearable device: a case study from a farming community in Japan	共著	2022 年 5 月	JOURNAL OF COMPUTATIONAL SOCIAL SCIENCE	Masashi Komori,Kosuke Takemura,Yukihisa Minoura,Atsuhiko Uchida,Rino Iida,Aya Seike,Yukiko Uchida	5(1),1069-1094
31.	大津　耕陽	演者と観客の共創体験を支援するライブ支援システム― 音楽ライブ現場における相互交流への技術支援と落語パフォーマンスへの応用	共著	2022 年 3 月	『観客と共創する芸術Ⅱ』埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書 14	大津耕陽, 福田悠人, 小林貴訓	(14),69-92
32.	美馬　達哉	人工呼吸器のモテ期と人間の尊厳―閉じ込め症候群の人びとは何を感じたか―、『学術会議叢書 30「人間の尊厳」とは―コロナ危機を経て―』	分担執筆	2023 年 3 月	公益財団法人日本学術協力財団編	美馬達哉, 姫野友紀子, 川口有美子, 鍾 宜錚, 柏﨑郁子, 田中美穂	
33.	美馬　達哉	新型コロナウイルス感染症と医療資源配分、『尊厳と生存』	分担執筆	2022 年 5 月	法政大学出版局	加藤, 泰史,後藤, 玲子	新型コロナウイルス感染症と医療資源配分
34.	姫野　友紀子	科学と伝統のあわいの身体	分担執筆	2022 年 6 月	京都芸術大学 東北芸術工科大学 出版局 藝術学舎		第 8 章
35.	津止　正敏	男性の介護：その実態と支援の課題	単著	2022　年 10 月	日本認知症ケア学会誌/株式会社ワールドプランニング		21(3),425-433
36.	斎藤　真緒	「ヤングケアラーの現状と自治体の支援策」	単著	2022 年秋	『自治体法務研究』		70: 33-37 頁
37.	斎藤　真緒	「家族介護への支援の課題－男性介護者とヤングケアラーを手がかりとして」	単著	2022年11月	『自治体法務研究』	70: 33-37 頁	
38.	斎藤　真緒	「あらためて、ヤングケアラー『ブーム』を問う―問題の射程と次元の再考のために」	単著	2022年11月	『現代思想 2022 年 11 月号　特集ヤングケアラー：家族主義的福祉・貧困の連鎖・子どもの権利・・・』	40－50 頁	

２．論文

No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査 読 有無
1.	稲葉　光行	メタバース上での「遊び」を媒介とした日本文化学習支援に関する研究	共著	2023 年 3 月	Ritsumeikan Research Center for Game Studies, Replaying Japan Journal，5	稲葉光行，細井浩一，Ruck Thawonmas，中村彰憲，and 上村雅之	PP．27～33	招待
2.	稲葉　光行	Exploring the Effects of COVID-19 on Motorcycle Riding Patterns and its Importance	共著	2023 年 1 月		Yukako Wada, Yoshifumi Bizen, Mitsuyuki Inaba		
3.	稲葉　光行	Estimating the Strength of Authorship Evidence with a Deep-Learning-Based Approach	共著	2022 年 12 年	Training，51	Shunichi Ishihara, Satoru Tsuge, Mitsuyuki Inaba, and Wataru Zaitsu		有
4.	稲葉　光行	On the launch of the Annals of Mixed Methods Research (AMMR)－The President of JSMMR Greetings	単著	2022 年 4 月	Annals of Mixed Methods Research，1（1）		PP．7～8	
5.	石田　賀奈子	児童養護施設を経験した若者の幼少期逆境体験に関連する要因	単著	2022 年 10 月	厚生労働統計協会，厚生の指標，69(12)		PP．16～22	有
6.	中村　正	加害者の変容可能性をひきだすための対話	単著	2023 年 2 月	精神看護出版，精神科看護，59（3）		PP．23～29	招待
7.	中村　正	臨床社会学の方法(39)脱暴力支援のグループワークとケースワーク	単著	2022 年 12 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，13(3)		PP．22～31	
8.	中村　正	臨床社会学の方法(38)暴力・性暴力の連続体	単著	2022 年 9 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，13(2)		PP．21～29	
9.	中村　正	加害行為研究の視界ー加害性、暴力性、暴力の文化、マイクロアグレッションー	単著	2022 年 7 月	青土社，現代思想，50(9)		PP．33～46	招待
10.	中村　正	臨床社会学の方法(37) 男性学のすすめ-コンネル『マスキュリニティーズ-男性性の社会科学』刊行の意義	単著	2022 年 6 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，13(1)		PP．20～28	
11.	村本　邦子	周辺からの記憶 38 東日本・家族応援プロジェクト 2020 in 福島	単著	2023 年 3 月	13(4)		PP．116～145	
12.	村本　邦子	周辺からの記憶 37 東日本・家族応援プロジェクト 2020 in 宮古	単著	2022 年 12 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，13(.3)		PP．123～131	
13.	村本　邦子	周辺からの記憶 36 東日本・家族応援プロジェクト 2020 in 多賀城	単著	2022 年 9 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，13(.2)		PP．148～171	

14.	村本　邦子	周辺からの記憶 35 東日本・家族応援プロジェクト 2020 in むつ	単著	2022 年 6 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，13(.1)		PP. 150～168	
15.	林　勇吾	How sequential suggestions from a robot and human jury influence decision making: A large scale investigation using a court sentencing judgment task	共著	2023 年 3 月	Proceedings of the 18th Annual ACM/IEEE International Conference on Human Robot Interaction (HRI2023)	Hayashi, Y. Wakabayashi, K. Nishida, Y.	筆頭著者	林 勇吾
16.	林　勇吾	Comparing Short-Term and Long-Term Online Courses Using the Kano Model and Neural Network Language Models	共著	2022 年 12 月	Proceedings of the 30th International Conference on Computers in Education. Asia-Pacific Society for Computers in Education (ICCE2022)	Marutschke, D, M. Hayashi, Y.	最終著者	林 勇吾
17.	林　勇吾	The Influence of Awareness of a Difference between Concept Maps on Transfer: Experimental Investigation on the Efficacy in Collaborative Learning	共著	2022 年 12 月	Proceedings of the 30th International Conference on Computers in Education. Asia-Pacific Society for Computers in Education (ICCE2022)	Shimojo, S. Hayashi, Y.	最終著者	林 勇吾
18.	林　勇吾	チャットボットによる個人適応型ヘルスケアの実現に向けた対話型課題の導入：解決志向アプローチを題材として	共著	2022 年 11 月	ヒューマンインタフェース学会論文誌	大津 耕陽，西田 勇樹，木内 敬太，林 勇吾	最終著者	林 勇吾
19.	林　勇吾	Kano Model-Based Macro and Micro Shift in Feature Perception of Short-Term Online Courses	共著	2022 年 11 月	Proceedings of the 28th International Conference on Collaboration Technologies and Social Computing (CollabTech 2022)	Marutschke, D, M. Hayashi, Y.	国際共著	林 勇吾
20.	林　勇吾	Relevant Knowledge Use During Collaborative Explanation Activities: Investigation by Laboratory Experiment and Computer Simulation Using ACT-R	共著	2022 年 11 月	Proceedings of 28th International Conference on Collaboration Technologies and Social Computing (CollabTech 2022)	Hayashi, Y. Shimojo, S.	筆頭著者	林 勇吾
21.	林　勇吾	Modeling perspective	共著	2022 年 7 月	Proceedings of the 23rd International	Hayashi, Y. Shimojo, S.	筆頭著者	林 勇吾

		taking and knowledge use in collaborative explanation: Investigation by laboratory experiment and computer simulation using ACT-R			Conference on Artificial Intelligence in Education (AIED2022)			
22.	林　勇吾	Investigating Clues for Estimating Near-Future Collaborative Work Execution State based on Learners' Behavioural Data during Collaborative Learning	共著	2022 年 6 月	Proceedings of the 18th International Conference on Intelligent Tutoring Systems (ITS2022)	Ohmoto, Y. Shimojo, S. Morita, J. Hayashi, Y.	最終著者	林 勇吾
23.	林　勇吾	AI-Supported Evaluation of KANO Model Features for Online Courses	共著	2022 年 5 月	ICIC International (Innovative Computing, Information and Control)	Marutschke, D, M. Hayashi, Y.	最終著者	林 勇吾
24.	斎藤　真緒	「子ども・若者ケアラー」をとりまく現状とジェンダー・家族	単著	2023 年 5 月	We learn/日本女性学習財団			斎 藤 真緒
25.	斎藤　真緒	子ども・若者ケアラーについて知っていますか？―18 歳を過ぎた若者ケアラーからのメッセージ―	監修	2023 年 3 月	京都橘ライオンズクラブ助成			斎 藤 真緒
26.	斎藤　真緒	「ヤングケアラーをめぐる諸問題」『女も男も』	分担執筆	2022 年 12 月	労働教育センター			斎 藤 真緒
27.	若林　宏輔	録画された会話の観察時の視点が評価に与える影響–日常会話におけるカメラ・パースペクティブ・バイアス		2022 年 11 月	法と心理	森井花音・若林宏輔・仲真紀子	22, 82-87.	有
28.	若林　宏輔	法律実務家のための心理学入門　第 21 回　科学鑑定の誤りと心理学的バイアス(2)		2022 年 10 月	季刊刑事弁護		112, 153 -156	無
29.	若林　宏輔	法律実務家のための心理学入門　第 20 回　科学鑑定の誤りと心理学的バイアス		2022 年 7 月	季刊刑事弁護		111, 141-144	無
30.	若林　宏輔	法律実務家のための心理学入門　第 19 回　生理・行動データによる判定技術は有効か？」		2022 年 4 月	季刊刑事弁護		110, 184-187.	無
31.	若林　宏輔	法律実務家のための心理学入門　第		2022 年 1 月	季刊刑事弁護		109, 157-160.	無

		18回　供述の信用性評価とは何か？」						
32.	早川　岳人	Effect of diabetes and prediabetes on the development of disability and mortality among middle-aged Japanese adults: A 22-year follow up of NIPPON DATA90.	共著	2022年11月	J Diabetes Investig	Tran Ngoc Hoang P, Kadota A, Yano Y, Harada A, Hayakawa T, Okamoto S, Miyagawa N, Kondo K, Okukda N, Kita Y, Okayama A, Fujita Y, Maegawa H, Miura K, Okamura T, Ueshima H; NIPPON DATA90 Research Group.	1897-1904. doi: 10.1111	有
33.	早川　岳人	Smoking habit is associated with impaired long-term quality of life in elderly people: a 22-year cohort study in NIPPON-DATA 90.	共著	2022年10月	Journal of Epidemiology	Liu YW, Okamura T,, Hirata A, Sato Y, Hayakawa T, Kadota A, Kondo K, Ohkubo T, Miura K, Okayama A, Ueshima H, for the NIPPON DATA90 Research Group.	JE-2022-0226.R1	有
34.	早川　岳人	Predictors of lower limb fractures in general Japanese: NIPPON DATA90	共著	2022年2月	Plos One	Yoshino Saito, Katsuyuki Miura, Hisatomi Arima , Takehito Hayakawa , Naoyuki Takashima, Yoshikuni Kita , Nagako Okuda , Akira Fujiyoshi , Toshiyuki Iwahori , Naoko Miyagawa, Keiko Kondo , Sayuki Torii , Aya Kadota , Takayoshi Ohkubo, Akira Okayama, Tomonori Okamura, Hirotsugu Ueshima ; NIPPON DATA90 Research Group	17(2):e0261716. doi: 10.1371	有
35.	安田　裕子	日本のホスピタリティ産業における外国人材のキャリア形成について―複線径路等至性モデリングによる異文化適応のプロセスの観点から	共著	2023年1月	日本観光ホスピタリティ教育学会，観光ホスピタリティ教育，16	宮城貴子	PP. 35～54	有
36.	安田　裕子	法と心理学会第22回大会 公認心理師の専門性における事実確認を目的とした面接スキル―教育・福祉・司法領域に広がる公認心理師による司法面接の活用とその課題	共著	2022年11月	法と心理学会，法と心理，22(1)	上宮愛・横光健吾・直原康光・安西敦・田中晶子・仲真紀子	PP. 57～64	
37.	安田　裕子	Understanding Serendipity in Buying Behavior	共著	2022年6月	Annals of Business Administrative Science, 21(4)	Kosuge, R.	PP. 75～90	
38.	矢藤　優子	Initial Challenges and protective factors for the	共著	2023年	立命館大学アジア日本研究所，Journal of the Asia-			有

		QOL of mothers with young children during COVID-19: in Japan and in China			Japan Research Institute of Ritsumeikan University, Vol.5			
39.	矢藤　優子	産後の夫婦の家事負担と妻の QOL の関連：「いばらきコホート調査」をもとに	共著	2022 年 10 月	日本保健福祉学会，日本保健福祉学会誌，29(1)	神崎真実・孫怡・妹尾麻美・肥後克己・中田友貴・鈴木華子・矢藤優子・安田裕子・岡本尚子・サトウタツヤ	PP. 15～22	有
40.	サトウ タツヤ	高校生のキャリア展望と「総合的な探究の時間」の関係ーTEA（複線径路等至性アプローチ）と関係学による検討	共著	2023 年 2 月	京都光華女子大学，京都橘大学研究紀要，49		PP. 171～193	
41.	サトウ タツヤ	A Case Study of Transductive Resolution: Analyzing the Practice of Inclusive Education for a Girl with down's Syndrome at an Elementary School in Japan	共著	2022 年 12 月	Sage , Integrative Psychological and Behavioral Science,	Kanzaki, M., Kato, H. & Sato,		有
42.	サトウ タツヤ	Career decision-making as dynamic semiosis: Autoethnographic trajectory equifinality modeling.	共著	2022 年 12 月	Sage , Culture & Psychology	Tschuchimoto, T., & Sato, T.		有
43.	サトウ タツヤ	チームで探究活動を行う生徒から見た総合学習の促進要因と課題（1）ー京都府立鳥羽高校のイノベーション探究 I の実践からー	共著	2022 年 12 月	京都光華女子大学短期大学部，京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要，58	乾明紀・田中誠樹・竹林祥子・大泉幸寛・宮﨑雄史郎・ミューリ ニコラス・久保友美・杉岡秀紀・高野拓樹・サトウタツヤ	PP. 123～141	有
44.	サトウ タツヤ	未必的殺意の説示と理解の過程；模擬評議の質的分析を通じて	共著	2022 年 11 月	日本評論社，法と心理，22	杉本菜月・サトウタツヤ	PP39～46	
45.	サトウ タツヤ	TEA は家族心理学に貢献できるか	単著	2022 年 9 月	日本家族心理学会，家族心理学年報，40		PP149～157	招待
46.	サトウ タツヤ	対人援助学&心理学の縦横無尽（34）	単著	2022 年 9 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，50			
47.	土田　宣明	老いに伴う「弱み」と「強み」	共著	2023 年 1 月	新曜社，心理学ワールド，100	土田宣明・春日彩花	PP. 16～19	招待
48.	土田　宣明	Post-error behavioral adjustments under reactive control among older adults	共著	2022 年 11 月	Frontiers Media SA , Frontiers in Psychology , 13	Noriaki Tsuchida, Ayaka Kasuga, Miki Kawakami		有
49.	北出　慶子	異文化間交流における類型化の試み	単著	2022 年 12 月	韓国日本学会，日本学報，133		PP. 245～258	有

		―包摂性を目指した多言語交流実践例から―						
50.	北出　慶子	日本語教育人材を育成する教師教育者―日本語教師教育者ネットワークの活動から―	共著	2022 年 4 月	日本語教育学会，日本語教育，181	嶋津百代・北出慶子・杉本香・中谷潤子	PP. 81～95	有
51.	斎藤　進也	視覚情報に付随する“遊びにくさ”を解消するためのゲーム設計に関する探索的研究―調査用ゲームの制作を通じた音による操作支援の検討―	共著	2023 年 3 月	立命館映像学，立命館映像学，16		PP. 26～63	
52.	岡本　尚子	産後の夫婦の家事分担と妻の QOL の関連：「いばらきコホート調査」をもとに	共著	2022 年 10 月	日本保健福祉学会，日本保健福祉学会誌，29（1）	神崎真実，孫怡，妹尾麻美，肥後克己，中田友貴，鈴木華子，矢藤優子，安田裕子，岡本尚子，サトウタツヤ	PP. 15～23	有
53.	山浦　一保	Prestige orientation and reconciliation in the workplace	共著	2022 年 11 月	Evolutionary Psychology，20(4)	Ohtsubo, Y, & Yamaura, K.	PP. 1～11	有
54.	山浦　一保	組織のダークサイドーそれでも人はつながり続ける	公開講演録	2022 年 11 月	南山大学人間関係研究センター，南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」，(22)		PP. 85～88	
55.	山浦　一保	「総合知」の共創：心の可視化技術に関するワークショップの成果と課題	共著	2022 年 6 月	一般社団法人，日本サイエンスコミュニケーション協会，サイエンスコミュニケーション，12(1)	神崎真実・山浦一保・藤田泰熙・王 天一・増田葉月・岡田志麻	PP. 42～48	有
56.	山口　洋典	PBL の風と土：(24)よりよい地域のために大学は地域と共に	単著	2023 年 3 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，13(4)		PP. 176～181	
57.	山口　洋典	『物語』を届け続けた 10 年が辿り着かせてくれた現在とこれから -企画セッション「物語を届ける」を通じて-	共著	2023 年 2 月	国際ボランティア学会，ボランティア学研究，23	団 士郎、上野知子、山口洋典	PP. 33～42	招待
58.	山口　洋典	コロナ禍における居場所づくり：越境知としてのボランティア学を求めて	共著	2023 年 2 月	国際ボランティア学会，ボランティア学研究，23	坂中俊介、蔵田 翔、佐藤すみれ、山口洋典、横関つかさ	PP. 43～53	招待
59.	山口　洋典	コロナ禍の中で迎えた東日本大震災からの 10 年に思いを馳せて―特集「越境知としてのボランティア学」の企画趣旨	単著	2023 年 2 月	国際ボランティア学会，ボランティア学研究，23		PP. 3～6	招待
60.	山口　洋典	ポスト COVID-19 における越境的支援のかたち-否定しない／学び続ける-	共著	2023 年 2 月	国際ボランティア学会，ボランティア学研究，23	今井紀明、宗田勝也、山口洋典	PP. 7～19	招待
61.	山口　洋典	再論・大学と震災とボランティアセンター：国際ボラ	共著	2023 年 2 月	国際ボランティア学会，ボランティア学研究，23	川原直也、八重樫綾子、赤澤清孝、其田雅美、山口洋典	PP. 21～32	招待

		ンティア学会第23回大会トークセッション						
62.	山口　洋典	第23回国際ボランティア学会大会報告	単著	2023 年 2 月	国際ボランティア学会，ボランティア学研究，23		PP. 125～130	招待
63.	山口　洋典	PBL の風と土：(23)協力的な関係にて学びと成長の旅仲間に	単著	2022 年 12 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，13(3)		PP. 166～171	
64.	山口　洋典	PBL の風と土：(22)大学と地域が共に見上げる北極星として	単著	2022 年 9 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，13(2)		PP. 209～214	
65.	山口　洋典	PBL の風と土：(21)自己と社会の関係性を市民性向上で醸成	単著	2022 年 6 月	対人援助学会，対人援助学マガジン，13(1)		PP. 207～212	
66.	和田　有史	Subjective health awareness and sensory ability of taste and olfaction: A case study of a health promotion class for older people	共著	2022 年 10 月	PLOS ONE，7（10）	Sana Inoue, Junji Watanabe, Yuji Wada		有
67.	大谷　いづみ	分断ではなく架橋へ――何らかの「困りごと」をもつ学生と何らかの「困りごとを」もつ教員支援の未来	単著	2022 年 8 月	立命館大学生存学研究所，立命館生存学研究，6		PP87～89	
68.	大谷　いづみ	開会挨拶	単著	2022 年 8 月	立命館大学生存学研究所，立命館生存学研究，6		PP. 49～50	
69.	大谷　いづみ	特集趣旨	単著	2022 年 8 月	立命館大学生存学研究所，立命館生存学研究，6		PP. 45～47	
70.	大谷　いづみ	「ただ生きて存（あ）る命がリスペクトされる未来を創りたい」	単著	2022 年 6 月	ハピネットファントム・スタジオ編『PLAN 75（映画パンフレット）		PP. 12～13	
71.	川端　美季	情報アクセシビリティとセーファースペース	単著	2022 年 8 月	立命館大学生存学研究所，立命館生存学研究，6		PP. 67～71	
72.	川端　美季	まちをきれいにする・ひとをきれいにする		2022 年 7 月	建築討論			
73.	中鹿　直樹	運動拒否を示す在宅リハビリテーション患者に対する価値に関する介入の効果–単一症例研究–	共著	2023 年 4 月	一般社団法人 日本認知・行動療法学会，認知行動療法研究，43(1)		PP234～34	有
74.	高橋　康介	Validation of the Japanese version of the Interoception Sensory Questionnaire for individuals with autism spectrum disorder.	共著	2022 年 12 月	Scientific reports，12（1）	Chihiro Itoi , Yuta Ujiie ,Kanae Matsushima ,Kohske Takahashi , Masakazu Ide		
75.	高橋　康介	Association of personality with	共著	2022 年 11 月	Dialogues in Health	Yuta Ujiie , Kohske Takahashi		

		habituation of physical and non-physical activities among Japanese adults: Results from questionnaire research before COVID-19 pandemic						
76.	高橋　康介	Subjective Sensitivity to Exteroceptive and Interoceptive processing in Highly Sensitive Person.	共著	2022 年 8 月	Psychological reports	Yuta Ujiie ,Kohske Takahashi		
77.	高橋　康介	Own-race faces promote integrated audiovisual speech information	共著	2022 年 5 月	Quarterly Journal of Experimental Psychology, (5)	Yuta Ujiie ,Kohske Takahashi	PP. 924 ～935	
78.	高橋　康介	Perception of audiovisual speech synchrony for familiar and unfamiliar ethnic speakers.	共著	2022 年 12 月	PERCEPTION, 51	Yuta Ujiie ,Kohske Takahashi	PP. 91	
79.	竹内　謙彰	成人期における主体的な学び態度―年齢による変化ならびに人生満足度との関連―	単著	2022 年 9 月	立命館産業社会論集			
80.	谷　晋二	日本語版 Child and Adolescent Mindfulness Measure の作成及び信頼性・妥当性の検討	共著	2022 年 3 月	立命館人間科学研究		最終著者	有
81.	谷　晋二	運動拒否を示す在宅リハビリテーション患者に対する価値に関する介入の効果–単一症例研究–	共著	2022 年 11 月	認知行動療法研究	仲上 恭子, 中鹿 直樹, 谷 晋二		有
82.	谷　晋二	Relational Frame Theory-Oriented Acceptance & Commitment Therapy Matrix for Autism-Spectrum Disorder: A Clinical Case Report	単著	2023 年 3 月	RITSUMEIKAN JOURNAL OF HUMAN SCIENCES		筆頭著者	
83.	泉　朋子	え一っと「あの字」の書き方は・・・語り掛けによって字形の主体的な想起を促す対話型筆記具	共著	2023 年 3 月	情報処理学会 インタラクション 2023	大津耕陽, 泉朋子		有
84.	泉　朋子	エージェントからの音声による災害情報が 当事者意	共著	2023 年 3 月		矢野友貴, 安藤雅行, 大津耕陽, 泉朋子		有

		識を喚起する効果の検証						
85.	泉　朋子	グループでの些細な行動選択支援を目的としたゲームの繰り返し試行の影響検	共著	2023 年 3 月	情報処理学会 インタラクション 2023	藤本哲基，安藤雅行，大津耕陽，泉朋子		有
86.	泉　朋子	複数人でのダイビング向け水中コミュニケーション支援デバイスの提案と有効性の検証	共著	2023 年 3 月	情報処理学会 インタラクション 2023	大城雄紀，安藤雅行，大津耕陽，泉朋子		有
87.	泉　朋子	親要素を持つチャットボットの語りが日常の振り返りに与える影響	共著	2023 年 3 月	HAI シンポジウム 2023			
88.	泉　朋子	グループでの些細な行動選択にゲームを導入することの効果検証	共著	2022 年 11 月	計測自動制御学会システム・情報部門学術講演会 2023	藤本哲基，大津耕陽，泉朋子		
89.	泉　朋子	日用品のエージェント化のための擬人性を感じさせる発話表現に関する調査	共著	2022 年 11 月	ヒューマンインタフェース学会論文誌	大津耕陽，泉朋子		有
90.	泉　朋子	オンライン授業の冒頭での通学動画の提示が意識の切り替えに与える影響の調査	共著	2022 年 9 月		大津 耕陽，磯田 竜輝，泉 朋子		
91.	泉　朋子	危険と安全の視点からのテキスト表現が避難意識に与える影響の比較検証	共著	2022 年 8 月	日本感性工学会論文誌	泉 朋子，若園 英里，北村 尊義		有
92.	泉　朋子	視点の低いアバタでの VR 体験の終了時における違和感軽減支援手法の検討	共著	2022 年 8 月	ヒューマンインタフェースシンポジウム	黒木 雄貴，大津 耕陽，泉 朋子		
93.	泉　朋子	An investigation of user perceptions of anthropomorphic linguistic expressions in guidance from home appliances	共著	2022 年 7 月	the 13th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics (AHFE 2022) and the Affiliated Conferences	Kouyou Otsu, Tomoko Izumi		有
94.	泉　朋子	Introducing a game to generate a sense of enjoyment and acceptance in the process of decision-making	共著	2022 年 7 月	the 13th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics (AHFE 2022) and the Affiliated Conferences	Satoki Fujimoto, Kouyou Otsu, Tomoko Izumi		有
95.	泉　朋子	Verification of the Effects of Personalized Evacuation Alerts using Behavioral or Location Information with	共著	2022 年 7 月	the 13th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics (AHFE 2022) and	Tomoki Yano, Kouyou Otsu, Tomoko Izumi		有

		the Sense of Urgency in a Disaster			the Affiliated Conferences			
96.	泉　朋子	自動車と自転車の運転者間コミュニケーションの比較検証	共著	2022 年 5 月	ヒューマンインタフェース学会論文誌	大城 雄紀, 北村 尊義, 泉 朋子		有
97.	泉　朋子	グループ意思決定にゲームを導入することによる楽しさと納得感の創出	共著	2022 年 5 月	ヒューマンインタフェース学会研究報告集	藤本哲基, 大津耕陽, 泉朋子		
98.	泉　朋子	災害時における当事者意識を喚起するテキスト情報表現－閲覧者の位置情報と状態情報に基づく検討-	共著	2022 年 5 月	ヒューマンインタフェース学会研究報告集	矢野友貴, 大津耕陽, 泉朋子		
99.	泉　朋子	日用家電による案内場面における擬人化された口調の導入効果の検討	共著	2022 年 5 月	ヒューマンインタフェース学会研究報告集	大津 耕陽, 泉 朋子		
100.	大津　耕陽	チャットボットによる個人適応型ヘルスケアの実現に向けた対話型課題の導入：解決志向アプローチを題材として	共著	2022 年 11 月	ヒューマンインタフェース学会論文誌	大津耕陽,西田勇樹,木内敬太,林勇吾	筆頭著者	有
101.	大津　耕陽	日用品のエージェント化のための擬人性を感じさせる発話表現に関する調査	共著	2022 年 11 月	ヒューマンインタフェース学会論文誌	大津耕陽,泉朋子	筆頭著者	有
102.	姫野　友紀子	Gradient-based parameter optimization method to determine membrane ionic current composition in human induced pluripotent stem cell-derived cardiomyocytes	共著	2022 年 11 月	Scientific Reports	Hirohiko Kohjitani, Shigeya Koda, Yukiko Himeno, Takeru Makiyama, Yuta Yamamoto, Daisuke Yoshinaga, Yimin Wuriyanghai, Asami Kashiwa, Futoshi Toyoda, Yixin Zhang, Akira Amano, Akinori Noma, Takeshi Kimura		有
103.	松室　美紀	両前腕の表示位置の操作による身体表象の変化に利用される手がかりの検討		2022 年 12 月	日本バーチャルリアリティ学会論文誌			
104.	松室　美紀	Top-down effect of body representation on pain perception		2022 年 5 月	PLoS ONE 17(5 5)	Matsumuro, M., Ma, N., Miura, Y., Shibata, F., Kimura, A.		

３.. 研究発表等

No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名
1.	稲葉　光行	Expanding activities to revitalize the city from the children's point of view: Update on Yawata Children's Conference off-school activities	2023 年 4 月	University Communiy Links (UCLinks) International Conference 2023	

2.	稲葉　光行	看護研究における混合研究法の学習と実践のハードル－GTxA によるデルファイ調査 の逐語録分析から－	2022 年 10 月	第 8 回日本混合研究法学会年次大会	稲葉光行, 髙木亜希子, 抱井尚子
3.	稲葉　光行	A study on promoting cross-cultural understanding among elementary school students through digital game-based learning using Minecraft	2022 年 8 月	Replaying Japan 2022	JH Shin
4.	稲葉　光行	Exploring learning possibilities for children navigating in-person and virtual communities	2022 年 4 月	University Communiy Links 2022 International Hybrid Conference	
5.	石田　賀奈子	子どもの意見表明支援のこれから ～児童福祉におけるアドボカシー活動の専門性の確立にむけて～	2022 年 12 月	日本子ども虐待防止学会 第 28 回学術集会ふくおか大会	石田賀奈子（企画者）和田一郎・伊藤嘉余子・西村英一郎
6.	石田　賀奈子	市町村レベルでの親子支援の現状についての報告 ―3 年間の市町村調査を元に―	2022 年 12 月	日本子ども虐待防止学会 第 28 回学術集会ふくおか大会	大澤ちひろ（筆頭）・和田一郎
7.	松田　亮三	普遍医療給付の徹底に向けた課題 医療機構論からの検討	2022 年 10 月	貧困研究会第 15 回研究大会	
8.	松田　亮三	刑事収容施設の医療体制―欧州を中心とした公衆衛生アプローチの国際的動向	2022 年 10 月	第 81 回日本公衆衛生学会総会	
9.	松田　亮三	刑事施設における医療の同等性を担保するための政策欧州の議論と取組み	2022 年 7 月	日本刑法学会関西部会令和 4 年度夏期例会	
10.	村本　邦子	「土地の力」と土着心理学の可能性	2022 年 10 月	日本質的心理学会第 19 回大会	
11.	村本　邦子	性的同意のグレーゾーン-誘惑なのか？強要なのか？	2022 年 9 月	日本心理臨床学会第 41 回大会	Susan Kolod、村本邦子、ガヴィニオ重利子
12.	村本　邦子	The Power of Land: Folktales and Resilience in the Aftermath of Tohoku Earthquake	2022 年 6 月	The Society for Qualitative Inquiry in Psychology (SQIP) 2022 conference	
13.	林　勇吾	コンセプトマップを用いた協同学習における worked example effect：Erroneous examples に着目した実験的検討	2023 年 3 月	人工知能学会第97回先進的学習科学と工学研究会 p.7-12	下條志厳・林勇吾
14.	林　勇吾	解決志向アプローチを題材としたチャットボットによる前向きな考え方の形成：高齢者を対象とした検証	2023 年 3 月	HAI シンポジウム 2023 発表論文集 P-71	大津耕陽・木内敬太・林勇吾
15.	林　勇吾	協同学習時の知識利用におけるワーキングメモリと共感性:ACT-R を用いた実験室実験とコンピュータシミュレーションによる検討	2022 年 9 月	日本認知科学会第39回大会論文集, 829-832	下條志厳・林勇吾
16.	林　勇吾	fan 課題を用いた干渉と新旧項目処理に関する実験的検討：瞳孔系に着目した予備的分析	2022 年 5 月	電子情報通信学会技術研究報告, 122,(23) 63-66	大石充希・林勇吾
17.	若林　宏輔	他者負罪型司法取引の意思決定と他者との親密性の関連	2022 年 12 月	日本パーソナリティ心理学会第 31 回大会, 沖縄市町村文化会館	
18.	若林　宏輔	法学・経済学・心理学からみる司法取引	2022 年 10 月	法と心理学会第 23 回大会, 千葉大学	若林宏輔・緑大輔・大角洋平・廣田貴也・櫻井光政
19.	若林　宏輔	司法 IT 化におけるオンライン証言の影響　法と心理学会	2022 年 10 月	法と心理学会第 23 回大会, 千葉大学	指宿信・岡田悦典・淵野貴生・藤田政博・水野亮太・若林宏輔・山本了宣

20.	若林　宏輔	日本版司法取引の意思決定において取引で得られる恩恵の質の違いが与える影響	2022 年 10 月	法と心理学会第 22 回大会，千葉大学	廣田貴也・若林宏輔
21.	若林　宏輔	道徳判断の反応時間による非人間化効果の検討－内的要因としての道徳アイデンティティの影響－　法と心理学会	2022 年 10 月	法と心理学会第 23 回大会，千葉大学	LIU ZEYU・若林宏輔
22.	安田　裕子	The effects of adverse childhood experiences(ACEs) of teenage mothers on physical and mental health and economic status	2023 年 3 月	26th East Asian Forum of Nursing Scholars	Okawa, S. , Makabe, M. , Kanaya, Y. , Shirai, C. , Shouho, M. , Ogawa, K. , Ueno, M. , & Morita, A.
23.	安田　裕子	子育てサポートに伴うマイクロ・コンフリクト―育児期女性へのインタビュー調査から	2023 年 3 月	日本発達心理学会第 34 回大会	柳井有加里・三品拓人・小林藍・鶴原美佑
24.	安田　裕子	TEM/TEA による対象理解―基礎を学ぶ	2023 年 3 月	日本発達心理学会第 34 回大会	
25.	安田　裕子	多文化ビジュアル・ナラティヴ―私と母の関係イメージ（司会）	2023 年 3 月	日本発達心理学会第 34 回大会	
26.	安田　裕子	子どもを通した母親同士のつながり―関係性と情報交換に着目して	2022 年 10 月	日本質的心理学会第 19 回大会	鶴原美佑・三品拓人・小林藍
27.	安田　裕子	高齢出産・育児の経験をした女性たちの語り―育児環境と経験の意味づけに着目して	2022 年 10 月	日本質的心理学会第 19 回大会	小林藍・三品拓人・鶴原美佑・安田裕子・矢藤優子
28.	安田　裕子	性暴力・ジェンダー暴力連続体と治療的司法	2022 年 10 月	法と心理学会第 23 回大会	中村正・藤澤陽子・宮﨑浩一・山口修平・後藤弘子・安田裕子
29.	安田　裕子	インターナルブランディングにおいて周縁的ストーリーが果たす役割	2022 年 10 月	日本マーケティング学会カンファレンス 2022	杉浦愛・小菅竜介・安田裕子
30.	安田　裕子	オンラインコメントセッション	2022 年 10 月	TEA と質的探究学会第 1 回大会	安田裕子・サトウタツヤ
31.	安田　裕子	TEA（複線径路等至性アプローチ）のいろは	2022 年 10 月	TEA と質的探究学会第 1 回大会	
32.	安田　裕子	教師のセルフケアをコミュニティ心理学的観点から考える	2022 年 9 月	日本コミュニティ心理学会第 25 回大会	市川章子・川本静香・松井良子・松野志歩・安田裕子
33.	安田　裕子	親への移行期に妻側が体験する夫婦関係が危機に至るプロセス―4 名の女性を対象とした半構造化インタビューによる質的分析	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	三田村仰・新舎純子・原田梓・安田裕子
34.	安田　裕子	複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）―応用編	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	サトウタツヤ・安田裕子
35.	矢藤　優子	コロナ禍における母子の生活の質の変化と関連要因：いばらきコホートにおける 2 時点比較調査	2023 年 3 月	日本発達心理学会第 34 回大会	木村 駿斗・ 連 傑濤・孫 怡・山口 祐司・李 星鎬・矢藤 優子
36.	矢藤　優子	育児支援タイプ別で見た養育環境と幼児の社会適応：中国都市部 2～3 歳児を対象とした調査	2023 年 3 月	日本発達心理学会第 34 回大会	孫 怡・ 矢藤 優子
37.	矢藤　優子	自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した療育プログラムの開発（24）―小学生中・高学年：関わりの促進を重視した療育プログラムの検討―	2023 年 3 月	日本発達心理学会第 34 回大会	浅野 史奈・陣内 里紗・松村 奈津・荒木 美知子・松元 佑・荒木 穂積・竹内 謙彰・矢藤 優子

38.	矢藤　優子	食事場面における親子関わり指標作成への試み―行動観察を用いて―	2023 年 3 月	日本発達心理学会第 34 回大会	連傑濤・王ギョク・孫怡・矢藤優子
39.	矢藤　優子	東アジアにおける女性の産後育児支援の多様性及び母子の well-being への影響	2023 年 3 月	日本発達心理学会第 34 回大会	司会者,企画者：矢藤 優子(立命館大学総合心理学部) 話題提供者：三品 拓人#(日本学術振興会) 話題提供者：Chen Tingting #(立命館大学人間科学研究科) 話題提供者：Han Juyeon #(Sungkyunkwan University) 指定討論者：サトウ タツヤ(立命館大学総合心理学部) 指定討論者：呉 宣児(共愛学園前橋国際大学国際コース)
40.	矢藤　優子	12 ヵ月齢時の母子のかかわりと母親の気質との関連	2022 年 12 月	日本パーソナリティ心理学会第 31 回大会	木村駿斗、連傑濤、山口祐司、陣内里紗、小林藍、近江涼音、孫怡、神崎真実、妹尾麻美、肥後克己、中田友貴、矢藤優子
41.	矢藤　優子	1 歳児を持つ養育者の育児環境, 育児生活の満足度と育児スキルの関連	2022 年 12 月	日本パーソナリティ心理学会第 31 回大会	近江涼音、連傑濤、木村駿斗、山口祐司、陣内里紗、小林藍、神崎真実、孫怡、妹尾麻美、肥後克己、中田友貴、矢藤優子
42.	矢藤　優子	子どもの気質、親子のかかわりと愛着の関連―生後 6 ヵ月・12 ヵ月の縦断的検討―	2022 年 12 月	日本パーソナリティ心理学会第 31 回大会	連傑濤・木村駿斗・陣内里紗・山口祐司・小林藍・近江涼音・孫怡・神崎真実・妹尾麻美・肥後克己・中田友貴・矢藤優子
43.	矢藤　優子	祖父母の養育態度が幼児の社会適応に及ぼす影響ー中国都市部の祖父母共同育児に着目してー	2022 年 12 月	日本パーソナリティ心理学会第 31 回大会	孫怡・矢藤優子・吉元洪・姜娜
44.	矢藤　優子	乳児の気質と母親の QOL についての縦断研究ー産後 6 ヵ月・9 ヵ月・12 ヵ月の 3 時点調査ー	2022 年 12 月	日本パーソナリティ心理学会第 31 回大会	矢藤優子、孫怡、連傑濤、木村駿斗、山口祐司、陣内里紗、近江涼音、小林藍
45.	矢藤　優子	母親の養育スキルと乳児の気質・社会性の関連について―生後 6 ヵ月・9 ヵ月・12 ヵ月の比較検討―	2022 年 12 月	日本パーソナリティ心理学会第 31 回大会	小林藍、連傑濤、木村駿斗、山口祐司、陣内里紗、近江涼音、神崎真実、孫怡、妹尾麻美、肥後克己、中田友貴、矢藤優子
46.	矢藤　優子	養育者-子のかかわり行動と子供の気質との関連 ―積み木課題場面の画像解析による検討―	2022 年 12 月	日本パーソナリティ心理学会第 31 回大会	中田友貴・吉田史明・木村駿斗・李星鎬・連傑濤・孫怡・矢藤優子
47.	矢藤　優子	神経心理学的描画検査における描画行為の質的分析－脳腫瘍の部位の影響	2022 年 12 月	第 46 回高次脳機能障害学会	
48.	矢藤　優子	高齢出産・育児の経験をした女性たちの語りー育児環境と経験の意味づけに着目してー	2022 年 10 月	日本質的心理学会第 19 回大会	小林藍・三品拓人・鶴原美佑・安田裕子・矢藤優子
49.	矢藤　優子	高齢出産婦における育児環境・QOL・抑うつ傾向との 29 関連	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	小林 藍・矢藤 優子・孫 怡
50.	矢藤　優子	養育場面における子どもの行動に対する保育者・保護者の危機評価の相違	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	近江 涼音・矢藤 優子
51.	矢藤　優子	COVID-19 と子育てに関する母親の情報リテラシー ―いばらき×大学連携共同研究⑤：年収・学歴・就労状況との関連―	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	木村 駿斗・連 傑濤・李 星鎬・鶴原 美佑・矢藤 優子・孫 怡・神崎 真実・サトウ タツヤ
52.	矢藤　優子	with コロナ時代における子育て世帯の実態・ニーズ調査と支援の充実- いばらき×大学連携共同研究①-	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	矢藤 優子・孫 怡・連 傑濤・木村 駿斗・神崎 真実・李 星鎬・鶴原 美佑
53.	矢藤　優子	コロナ禍における母親の QOL と子どもへのかかわり いばらき×大学連携共同研究③	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	神崎 真実・李 星鎬・鶴原 美佑・連 傑濤・矢藤 優子・孫 怡・木村 駿斗
54.	矢藤　優子	新型コロナウイルス感染症(COVID-19)流行下における母親の QOL と悩み事との関連 -いばらき×大学連携共同	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	李 星鎬・鶴原 美佑・矢藤 優子・神崎 真実・孫 怡・連 傑濤・木村 駿斗

		研究②-			
55.	矢藤　優子	養育者の家族資源と健康状態がコロナ禍における困り事に与える影響 いばらき×大学連携共同研究④	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	連 傑濤・孫 怡・木村 駿斗・神崎 真実・李 星鎬・鶴原 美佑・矢藤 優子
56.	矢藤　優子	Childcare and work support for women in East Asia	2022 年 6 月	The 2022 Annual Conference for the Society for Qualitative Inquiry in Psychology	Yuko Yato Tingting Chen Juyeon Han Mishina Takuto
57.	サトウ タツヤ	A Proposal for the Usefulness of a Cross-Check Table of Period Classification and individuation Processes in TEM -From Interviews with Three Self-made Cosplayers	2023 年 1 月	The 5th Transnational Meeting on TEA	Misato Fukuyama and Tatsuya Sato
58.	サトウ タツヤ	Personal culture analyzed in the "garden task" -The example of the Japanese garden-	2023 年 1 月	The 5th Transnational Meeting on TEA	Megumi Nishikawa・Teppei Tsuchimoto・Tatsuya Sato
59.	サトウ タツヤ	The Longitudinal Study of carriers using TEA	2023 年 1 月	The 5th Transnational Meeting on TEA	aiyo Miyashitao・Tatsuya Sato
60.	サトウ タツヤ	The relationship between carer prospects of high school students and Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study	2023 年 1 月	The 5th Transnational Meeting on TEA	Akinori Inui and Tatsuya Sato
61.	サトウ タツヤ	コスプレイヤーの個体化(individuation)のプロセスとは	2022 年 10 月	第 29 回日本質的心理学会	福山未智・隅本正友
62.	サトウ タツヤ	模擬裁判員裁判における裁判官と裁判員の関係変容	2022 年 10 月	第 29 回日本質的心理学会	杉本菜月・サトウタツヤ
63.	サトウ タツヤ	三名の自作派コスプレイヤーへのインタビューから遊びの発達プロセスを検討する	2022 年 10 月	第 1 回 TEA と質的探究学会	福山未智・隅本雅友・サトウタツヤ
64.	サトウ タツヤ	男子大学生の生理に対する理解-会話分析・発生の三層モデルによる検討	2022 年 10 月	第 1 回 TEA と質的探究学会	門田菜々・土元哲平・サトウタツヤ
65.	サトウ タツヤ	統合された個人的志向性（Synthesized Personal Orientation；SPO）の検討	2022 年 10 月	第 1 回 TEA と質的探究学会	市川章子・小田友理恵・サトウタツヤ
66.	サトウ タツヤ	History of Quality Psychology in Japan	2022 年 6 月	The Society for Qualitative Inquiry in Psychology, Annual Conference	SATO, Tatsuya & OMI, Yasuhiro
67.	サトウ タツヤ	「磁場」効果の心理的機能；立会い弁護人の心理的効果	2022 年 5 月	第 100 回刑法学会	
68.	北出　慶子	日本語教育現場に根づく言説に対する日本語教師教育者の省察と意識化	2023 年 5 月	日本語教育学会 春季大会	嶋津百代・門脇薫・北出慶子・新矢麻紀子・杉本香・中谷潤子・西村美保
69.	北出　慶子	大学での日本語教師養成課程は、何を目指すのか―プログラム開発、実習、キャリア、日本語学習支援の観点からみる今とこれから―	2023 年 5 月	日本語教育学会 春季大会	北出慶子・澤邉裕子・嶋津百代・杉本香
70.	北出　慶子	地域の多文化共生活動への参画と市民性教育を目指した地域と大学との連携―大阪茨木市 x 立命館大学の連携初期段階からの報告	2023 年 3 月	言語文化教育研究学会 第 9 回年次大会	北出慶子・遠藤知佐・西村聖子・山口洋典

71.	北出　慶子	参加学生はキャンパスアジア留学経験をどのように捉えたか―就職活動というライフ・トランジションにおける留学への意味付け―	2022 年 6 月	異文化間教育学会　第43回大会	
72.	北出　慶子	国際共修ルーブリック―開発とそのプロセス―	2022 年 6 月	異文化間教育学会　第43回大会	末松和子、北出慶子、村田晶子、尾中夏美、髙橋美能、秋庭裕子
73.	斎藤　進也	3DCG 空間において短時間で濃密な「旅」を体験できる移動システムの検討	2023 年 3 月	INTERACTION 2023	岡田陸
74.	斎藤　進也	視覚障害の有無によらず使用しやすいゲーム UI デザインの検討	2023 年 3 月	INTERACTION 2023	長谷川綾音
75.	斎藤　進也	京都ストリート文化アーカイブの構築と発信プロジェクト	2023 年 2 月	立命館大学アート・リサーチセンター 文部科学省　国際共同利用・共同研究拠点 「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」「日本文化デジタル・ヒューマニティーズ拠点」プロジェクト成果発表会	竹田章作
76.	斎藤　進也	音による操作支援を中心としたゲーム設計に関する研究 -調査用アプリケーション制作を通じた考察-	2023 年 1 月	2022年度立命館大学人間科学研究所年次総会	長谷川綾音
77.	斎藤　進也	視点移動操作に対応した部分拡大縮小を行う 3DCG 空間表現	2023 年 1 月	2022年度立命館大学人間科学研究所年次総会	岡田陸
78.	斎藤　進也	3DCG spatial representation with partial scaling in response to viewpoint movement operations	2022 年 8 月	Repalaying Japan 2022	岡田陸
79.	斎藤　進也	An Exploratory Research on Game Design that Supports Operation with Sound: Considering Production Process Through the Development of Videogame for Investigation	2022 年 8 月	Repalaying Japan 2022	長谷川綾音
80.	岡本　尚子	2 人による打楽器演奏中の脳活動計測 ―fNIRS 装置による前額部の相関―	2023 年 1 月	第16回日本音楽医療研究会学術集会	江田英雄，黒田恭史，岡本尚子，山崎まどか
81.	岡本　尚子	自然体験活動場面における危険予測時の視線特徴―初心者と経験者の比較―	2022 年 11 月	日本教育実践学会第25回研究大会	岡本尚子，黒田恭史
82.	岡本　尚子	日本語指導を必要とする児童の算数文章問題遂行時の課題－視線計測データを中心に－	2022 年 10 月	第35回日本保健福祉学会学術集会	
83.	岡本　尚子	ドラマ視聴時における男女の着眼点の違い ―恋愛ドラマに着目して―	2022 年 5 月	第 40 回日本生理心理学会大会	岡本尚子，樋口 陽香，黒田 恭史
84.	岡本　尚子	メンタルローテーション課題における視線移動と脳活動の探索的検討	2022 年 5 月	教育システム情報学会 2022 年度 第 1 回研究会	近藤竜生，岡本尚子，黒田恭史，田邊宏樹
85.	山浦　一保	職場における妬み感情の緩和に向けた実証の試み －上司との関係性、感謝の気持ちで過ごす1週間の力は妬みの増幅を食い止める？－	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	山浦一保・大坪庸介・日隈さつき
86.	山浦　一保	怠惰なふるまいは強い妬み感情の温床となるのか	2022 年 9 月	日本心理学会第 86 回大会	日隈さつき・山浦一保
87.	山浦　一保	上司との関係性、感謝経験は妬みの解毒剤になりうるか	2022 年 9 月	産業・組織心理学会第 37 回大会	山浦一保・橋本海斗・日隈さつき・大坪庸介

88.	堀江　未来	国際科学交流の可能性：非認知的能力育成の観点から	2023 年 2 月	第14回科学教育の国際化を考えるシンポジウム	
89.	堀江　未来	Global Learning in Japan: What makes global success?	2022 年 12 月	Global Learning in Japan 2022	
90.	堀江　未来	私の知らない世界を、あの人は知っている？ーボーダーを越えて未来を創るための、異文化感受性とはー	2022 年 12 月	ソニーグループ　ダイバーシティ・サステイナビリティフォーラム	
91.	堀江　未来	国際共修・大学の国際化	2022 年 5 月	信州大学グローバル化推進センター主催 FD セミナー	
92.	山口　洋典	地域と大学の連携で「つながる」を越えて何を目指すのか？ー日本語学習支援・多文化交流における地域と大学の変容型パートナーシップに向けてー	2023 年 3 月	言語文化教育研究学会第 9 回年次大会	北出慶子、澤邊裕子、中川祐治、早矢仕智子、遠藤知佐、西村聖子、川田麻記、牧田東一、佐藤弘子、山口洋典
93.	山口　洋典	実験・実践のリアリティと社会のアクチュアリティ：再現可能な一般性の発見と個別性からの普遍性の追求のあいだで	2022 年 9 月	日本グループ・ダイナミックス学会 第 68 回大会	山口 洋典、矢守 克也、鮫島 輝美、Patricia Leavy
94.	永井　聖剛	前後左右方向に不均一なパーソナルスペースの広がり	2022 年 10 月	日本認知心理学会第 20 回大会	
95.	永井　聖剛	脳内将棋盤の視覚イメージの個人差に関する調査	2022 年 10 月	日本認知心理学会第 20 回大会	善本 悠介・永井 聖剛
96.	和田　有史	食品画像の背景色が食品ジェンダーステレオタイプに与える影響	2022 年 12 月	電子情報通信学会ヒューマン情報処理研究会	櫻井美穂、木村　敦、和田有史
97.	和田　有史	一緒にならぶとおいしそうに見える：チキンマックナゲット®における チアリーダー効果の検討	2022 年 12 月	日本基礎心理学会第 41 回大会	西田勇樹,江口更紗,櫻井美穂,田中優衣,和田有史
98.	和田　有史	食品の多様性が見た目のおいしさと感性満腹感に与える影響: チキンマックナゲット®を用いた検討	2022 年 11 月	日本官能評価学会 2022 年大会	西田勇樹，江口更紗，櫻井美穂，田中優衣，和田有史
99.	和田　有史	ビーフジャーキーはスルメの夢を見るか?: カテゴリ不一致な匂いの提示が食味に与える影響の検討	2022 年 9 月	第 13 回多感覚研究会	西田勇樹・川浪美結・見崎己太朗 ・大野雅貴 ・天野祥吾 ・鳴海拓志 ・小早川達 ・和田有史
100.	和田　有史	絵文字と形で食味を伝える	2022 年 9 月	第 13 回多感覚研究会	
101.	和田　有史	心理学の「食」への展開と応用	2022 年 9 月	日本応用心理学会第 88 回大会	
102.	和田　有史	消費者の新食品の受容とリスク認識	2022 年 7 月	大日本農会　食用タンパク質研究会	
103.	大谷　いづみ	「PLAN75」上映会＆トークイベント報告	2023 年 1 月	2022年度人間科学研究所年次総会	大谷いづみ・川端美季
104.	大谷　いづみ	教育におけるアクセシビリティと障害学生の存在が拓くＳＤＧ’ｓ社会の未来	2023 年 1 月	立命館大学デザイン科学研究センター	大谷いづみ・川端美季
105.	大谷　いづみ	「「障害のある教員」の職場復帰のプロセスと課題」	2023 年 1 月	立命館大学土曜講座 1 月テーマ「障害のある先生が仕事を続けるということ――障害と教育の交わるところ」	
106.	大谷　いづみ	『PLAN 75』トーク・セッション	2022 年 12 月	『PLAN75』上映会＆トークイベント	早川千絵、斎藤真緒
107.	川端　美季	【特集 2】情報アクセシビリティのいまとこれから	2022 年 8 月	立命館大学生存学研究所，立命館生存学研究，6	大谷いづみ・川端美季
108.	川端　美季	シンポジウムのまとめ－Summary of the Symposium－シンポジウム	2022 年	医学哲学医学倫理，40	川端 美季，有馬 斉

		AID(DI)の倫理：出自を知る権利をめぐるこれまでの議論の経緯と今後の課題			
109.	古野 公紀	行動分析学入門:「行動」を中心に考えることとは	2023 年 2 月	アルコール関連問題予防研究会	
110.	古野 公紀	他個体が乱動比率スケジュールにおけるハトのキーつつき行動におよぼす効果: 新たなハーム・リダクション戦略としての共同ギャンブル	2022 年 10 月	日本行動分析学会第40回年次大会	
111.	古野 公紀	ルール支配行動研究の歴史	2022 年 10 月	日本認知・行動療法学会第 48 回大会	
112.	竹内　謙彰	自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した療育プログラムの開発(25) ―文脈を踏まえた視線の動きに注目した検討―	2023 年 3 月	日本発達心理学会第 34 回大会	蓼沼力・吉田崇裕・小林藍・近江涼音・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰・矢藤優子
113.	竹内　謙彰	自閉症スペクトラム児の多様性と自主性を尊重した療育プログラムの開発 (24) ―小学生中・高学年：関わりの促進を重視した療育プログラムの検討―	2023 年 3 月	日本発達心理学会第 34 回大会	浅野史奈・陣内里紗・松村奈津・荒木美知子・松元佑・荒木穂積・竹内謙彰・矢藤優子
114.	谷　晋二	行動分析学、関係フレーム理論、ACT、そして PBT-進化学と CBS の再会-	2023 年 3 月	ACT Japan　年次ミーティング 2022	招待講演
115.	谷　晋二	言語、この素晴らしい能力-行動分析学の枠組みで、言葉をうまく使う-	2023 年 3 月	発達心理学会　第 34 回大会	招待講演
116.	谷　晋二	Acceptance	2022 年 11 月	AsiaFlex series	
117.	谷　晋二	自閉スペクトラム症児を育てる親に対するアクセプタンス&コミットメント・セラピーの実践	2022 年 10 月	日本認知・行動療法学会第 48 回大会	岡島　純子（立教大学）　谷　晋二（立命館大学）　Tamar Black　(Educatioonal & Developmental Psychologist　吉武　遥奈（東京家政大学付属臨床センター）　熊野　宏明（早稲田大学）
118.	谷　晋二	ルール支配行動と PBT-基礎と臨床をつなぐ-	2022 年 10 月	日本認知・行動療法学会第 48 回大会	津田　菜摘（同志社大学），古野　公記(立命館大学)，茂本　由紀（武庫川女子大学），菅原　大地（筑波大学）　谷　晋二(立命館大学)
119.	谷　晋二	Process-based Therapy	2022 年 9 月	日本認知・行動療法学会第 48 回大会	
120.	谷　晋二	Il modello di collegamento e l'Extended Evolutionary Meta Model per sostenere una persona con disabilità Relatore	2022 年 9 月	17º CONVEGNO NAZIONALE SU QUALITÀ DELLA VITA E DISABILITÀ	招待講演
121.	谷　晋二	Review of the Study of Rule-Governed Behavior in Japan	2022 年 9 月	ABAI　11th International Conference; Dublin, Ireland	Shinji Tani, Yuki Shigemoto, Kazuya Inoue
122.	泉　朋子	え一っと「あの字」の書き方は・・・語り掛けによって字形の主体的な想起を促す対話型筆記具	2023 年 3 月	情報処理学会 インタラクション 2023	大津耕陽，泉朋子
123.	泉　朋子	エージェントからの音声による災害情報が 当事者意識を喚起する効果の検証	2023 年 3 月	情報処理学会 インタラクション 2023	矢野友貴，安藤雅行，大津耕陽，泉朋子
124.	泉　朋子	グループでの些細な行動選択支援を目的としたゲームの繰り返し試行の影響検証	2023 年 3 月	情報処理学会 インタラクション 2023	藤本哲基，安藤雅行，大津耕陽，泉朋子
125.	泉　朋子	複数人でのダイビング向け水中コミュニケーション支援デバイスの提案と有効性の検証	2023 年 3 月	情報処理学会 インタラクション 2023	大城雄紀，安藤雅行，大津耕陽，泉朋子
126.	泉　朋子	親要素を持つチャットボットの語りが日常の振り返り	2023 年 3 月	HAI シンポジウム 2023	

		に与える影響			
127.	泉　朋子	グループでの些細な行動選択にゲームを導入することの効果検証	2022 年 11 月	計測自動制御学会 システム・情報部門学術講演会 2022	藤本哲基, 大津耕陽, 泉朋子
128.	泉　朋子	視点の低いアバタでのVR体験の終了時における違和感軽減支援手法の検討	2022 年 8 月	ヒューマンインターフェイスシンポジウム 2022	黒木 雄貴, 大津 耕陽, 泉 朋子
129.	泉　朋子	グループ意思決定にゲームを導入することによる楽しさと納得感の創出	2022 年 5 月	ヒューマンインタフェース学会研究会	藤本哲基, 大津耕陽, 泉朋子
130.	泉　朋子	災害時における当事者意識を喚起するテキスト情報表現－閲覧者の位置情報と状態情報に基づく検討-	2022 年 5 月	ヒューマンインタフェース学会研究会	矢野友貴, 大津耕陽, 泉朋子
131.	泉　朋子	私はレンジだよ！よろしくね！：日用家電による案内場面における擬人化された口調の導入効果の検討	2022 年 5 月	ヒューマンインタフェース学会研究会	大津 耕陽, 泉 朋子
132.	大津　耕陽	An investigation of user perceptions of anthropomorphic linguistic expressions in guidance from home appliances	2022 年 7 月	the 13th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics (AHFE 2022)	Kouyou Otsu, Tomoko Izumi
133.	大津　耕陽	Introducing a game to generate a sense of enjoyment and acceptance in the process of decision-making	2022 年 7 月	the 13th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics (AHFE 2022)	Satoki Fujimoto, Kouyou Otsu, Tomoko Izumi
134.	大津　耕陽	Verification of the Effects of Personalized Evacuation Alerts using Behavioral or Location Information with the Sense of Urgency in a Disaster	2022 年 7 月	the 13th International Conference on Applied Human Factors and Ergonomics (AHFE 2022)	Tomoki Yano, Kouyou Otsu, Tomoko Izumi
135.	御旅屋　達	大阪府「定着支援事業」から見る高卒就職後の課題	2022 年 5 月	社会政策学会第 144 回大会	
136.	星野　祐司	移動ドットの個数推定に非同期終了と移動ドット数が及ぼす影響	2022 年 10 月	日本認知心理学会第 20 回大会	

４．主催したシンポジウム・研究会等

No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1.	えん罪救済へのさらなる挑戦：イノセンス・プロジェクト・ジャパンのこれから	オンライン	2022 年 11 月	100 名	イノセンス・プロジェクト・ジャパン（えん罪救済センター）他
2.	性と生殖に関する社会政策・制度研究会	衣笠キャンパス(予定)	2023 年 2 月	20 人程度	
3.	日本子ども虐待防止学会公募シンポジウム	福岡国際会議場	2022 年 12 月	100 名程度	日本子ども虐待防止学会で報告
4.	社会病理学会シンポジウム	北陸学院大学	2022 年 11 月	50 名	
5.	法と心理学会ワークショップ	千葉大学	2022 年 11 月	30 名	成城大学治療的司法研究センター
6.	第一回地域健康社会学研究センター研究会	朱雀キャンパス・Zoom	2022 年 8 月	12 名	人間科学研究所インクルーシブ医療社会サービスプロジェクト
7.	第二回地域健康社会学研究センター研究会	衣笠キャンパス・Zoom	2022 年 10 月	8 名	人間科学研究所インクルーシブ医療社会サービスプロジェクト
8.	第三回地域健康社会学研究センター研究会	衣笠キャンパス・Zoom	2022 年 11 月	8 名	人間科学研究所インクルーシブ医療社会サービスプロジェクト
9.	第四回地域健康社会学研究センター研究会	衣笠キャンパス・Zoom	2023 年 2 月	7 名	人間科学研究所インクルーシブ医療社会サービスプロジェクト
10.	人間科学研究所年次総会「20 年を迎えた TEA（複線径路等至性アプローチ）；その広がりと可能性」	大阪いばらきキャンパス	2023 年 1 月	100 名	

11.	The 28th International Conference on Collaboration Technologies and Social Computing	サンティアゴ（チリ）	2022 年 11 月	50 名	一般社団法人情報処理学会，Universidad de los Andes, University of Chile
12.	日本認知科学会第 39 回大会 オーガナイザウドセッション	オンライン	2022 年 9 月	40 名	日本認知科学学会
13.	ヒューマンメディア合同研究会	茨木キャンパス	2022 年 9 月	50 名程度	なし
14.	合評会「櫛原克哉『メンタルクリニックの社会学』（青土社、2022 年)と駒澤真由美『精神障害を生きる』(生活書院、2022 年)」	龍谷大学梅田キャンパス（ハイブリッド）	2023 年 1 月	30 名	医療社会学研究会主催 立命館大学人間研、生存研共催
15.	介護フォーラム「コロナ過と『私の介護』」	衣笠キャンパス・オンライン	2022 年 11 月 27 日	30 名	男性介護ネット
16.	ケアラー支援条例市民フォーラム(仮称)	朱雀キャンパス	2023 年 2 月	100 名	京都ケアラーネット
17.	子ども・若者ケアラーの「声」を社会に発信する	オンライン	2023 年 2 月・3 月	のべ 120 名	日本版ヤングケアラーアクションデー

５．その他研究活動（報道発表や講演会等）

No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1.	稲葉　光行	テキストマイニングによる帝銀事件の供述分析	NHK スペシャル・未解決事件 File.09 「松本清張と帝銀事件」	2022 年 9 月～12 月
2.	稲葉　光行	えん罪被害なくせ 支援団体がクラウドファンディング	NHK NEWS WEB	2022 年 10 月 4 日
3.	稲葉　光行	混合研究法による知の結晶	第 8 回日本混合研究法学会年次大会	2022 年 10 月
4.	稲葉　光行	注目のメタバース、その可能性とは私たちの生活をどのように変革するのか	NIRA 総合研究開発機構「わたしの構想~メタバースが開く〝新〟たな現実」No.59 2022.04.08	2022 年 4 月
5.	中村　正	書評　ジェンダー平等政策における男性問題の位置付けの必要性と課題 伊藤公雄ほか『男性危機？』	『図書新聞』第 3585 号	2023 年 4 月
6.	村本　邦子	平和教育　大人との日常が大切	朝日新聞 2022 年 8 月 21 日紙面	2022 年 8 月
7.	安田　裕子	「学振申請書作成講座」日本学術振興会特別研究員 申請内容ファイル作成のポイント（講習会）	立命館大学（オンライン開催）、2023 年度日本学術振興会特別研究員申請ガイダンス	2023 年 4 月
8.	安田　裕子	総合心理学部の基礎演習 I について	立命館大学教育開発推進機構	2023 年 4 月
9.	安田　裕子	顧客の生活世界をフォーカスする分析視角―TEA に注目して	グランフロント大阪、第 40 回価値共創型マーケティング研究報告会	2023 年 3 月
10.	安田　裕子	総合心理学部の基礎演習について（2022 年度 第 4 回教学実践フォーラム 立命館大学における研究への接続の取り組み）	立命館大学（オンライン開催）、立命館大学教育開発推進機構	2023 年 3 月
11.	安田　裕子	警察トレーナーを中心とした司法面接フォローアップ	石川県警察本部	2022 年 9 月
12.	安田　裕子	第 2 部 安田裕子先生に相談会	オンライン開催、TEA と質的探究学会主催「探 Q 茶会」	2022 年 8 月
13.	安田　裕子	虐待・DV 被害を受けた子と親の心身への影響とその支援	幌市（オンライン開催）、札幌弁護士会実務研究会「離婚と子どもに関する研究会（りこけん）」	2022 年 8 月
14.	安田　裕子	「学振申請書作成講座」日本学術振興会特別研究員 申請内容ファイル作成のポイント（講習会）	立命館大学（オンライン開催）、2023 年度日本学術振興会特別研究員申請ガイダンス	2022 年 4 月 6 日
15.	安田　裕子	「学振申請書作成講座」日本学術振興会特別研究員 申請内容ファイル作成のポイント（講習会）	立命館大学（オンライン開催）、2023 年度日本学術振興会特別研究員申請ガイダンス	2022 年 4 月 4 日
16.	矢藤　優子	A Comparative Study on the Diversity of Postpartum Childcare Support for Working Women and the Well-being of Mothers and Children in Asia	台北師範大学講演会	2023 年 3 月
17.	矢藤　優子	くさねっこカレッジ「子どもとのかかわり方を学ぶ」	草津川跡地公園 de 愛ひろば教養室	2022 年 7 月

18.	矢藤　優子	子育て・子育ち・そして…　～みんなで子育てできる街に～	2022 年度いばらき市民活動応援フェスタ	2022 年 5 月
19.	サトウ　タツヤ	TEA は質的探究に何をもたらしたのか？	立命館大学人間科学研究所年次総会シンポジウム	2023 年 1 月
20.	北出　慶子	越境する人とその支援者の発達を支える：日本語教育における TEA	2022 年度 立命館大学 人間科学研究所年次総会	2023 年 1 月
21.	北出　慶子	日本語教育でつながる―越境コミュニケーションと日本語教育―	韓国日本研究団体 第 11 回国際学術大会 （韓国日本学会創立 50 周年記念）	2022 年 8 月
22.	北出　慶子	新しい時代のコミュ力とは？	立命館大学ライブラリー企画　ぴあら de トーク	2022 年 6 月
23.	山浦　一保	弥報 Magazine デスクで心理学－対話で高める「チーム力」－（5 面）		2022 年 11 月
24.	山浦　一保	「利他の心」稲盛流経営	読売新聞 WATCHERS（経済 10 面）	2022 年 10 月
25.	山浦　一保	特集「プレーモデル」「プレーコンセプト」「プレースタイル」を再定義する：スポーツチームの組織心理学－人と人の関係に立ち戻る	フットボール批評 issue	2022 年 9 月
26.	山浦　一保	チームにおけるリーダーシップとコミュニケーション	2022 年度「2025 年大阪・関西万博」に向けた学生参画支援プログラム	2023 年 2 月
27.	山浦　一保	S4 チームの機能を高めるヒント「組織の活動基盤としてのチーミング」	第 45 回 2023 産業安全対策シンポジウム	2023 年 2 月
28.	山浦　一保	人との関わりの中の組織マネジメント － しなやかで力強い人間力と組織を目指して －	株式会社 クレオテック　2022 年度 部長研修	2023 年 2 月
29.	山浦　一保	組織内外における人間関係構築と組織経営／人間関係構築のためのトレーニング	静岡県立大学経営情報学部	2022 年 12 月
30.	山浦　一保	令和 4 年 進学エンカレッジ推進事業 生徒資質･能力向上プログラム模擬講義「チームを強くする条件」	令和 4 年 進学エンカレッジ推進事業	2022 年 11 月
31.	山浦　一保	住友商事株式会社・労働組合共催主催「武器としての組織心理学－感情のダークサイドからのピープルマネジメント」	住友商事株式会社	2022 年 11 月
32.	山浦　一保	2022 年度 総括主任家庭裁判所調査官研究会「組織心理学（リーダーシップ、マネジメント、人材育成）」	東京家庭裁判所	2022 年 11 月
33.	山浦　一保	立命館大学　2022UNIVERSITY LIFE Seminar 福岡堅樹氏講演 第二部パネルディスカッション（ファシリテーター）	立命館大学学生部主催	2022 年 10 月
34.	山浦　一保	「ネガティブ感情」をいかにポジティブに変え、組織を活性化していくのか	HR コンソーシアム 分科会	2022 年 10 月
35.	山浦　一保	京都府立乙訓高等学校 模擬講義「チームを強くする条件」	京都府立乙訓高等学校	2022 年 10 月
36.	山浦　一保	組織のダークサイド―それでも人はつながり続ける―	南山大学 人間関係研究センター	2022 年 7 月
37.	川端　美季	BATHING, CLEANLINESS, AND HOME HYGIENE IN MODERN JAPAN	Association for Asian Studies, Annual Conference	2023 年 3 月
38.	川端　美季	日本の銭湯の歴史――大阪を中心に	おさか府民ネット大阪府・市共催講座「おおさか銭湯ザ・ワールド ～銭湯の歴史・魅力・楽しみ方～」	2023 年 2 月
39.	川端　美季	大正時代の崇仁地域の公衆浴場	崇仁~ひと・まち・れきし~vol.14 完成記念講演会	2022 年 11 月
40.	清家　理	認知症はじめの一歩:第２版	国立長寿医療研究センター	2022 年 4 月
41.	美馬　達哉	○○コラム「精神疾患・障害をめぐるせめぎ合いの社会学―コンテステーションの諸相―」	ラウンドテーブル・ディスカッション企画、第 48 回保健医療社会学会大会（松山市）	2022 年 5 月

42.	美馬　達哉	COVID-19 and Life Itself: The Case of Ventilator Users	Covid-19 Conference “Learning lessons from Covid-19: Hearing voices from multi-lingual cultural and vulnerable communities”	2022 年 4 月
43.	津止　正敏	入試問題『男が介護する-家族のケアの実態と支援の取組み-』	宇部フロンティア大学入試問題「国語」	2023 年 3 月
44.	津止　正敏	コラム	京障連機関紙」『ひゅうまん京都』	2002 年 4 月～2022 年 12 月
45.	津止　正敏	記念講演	広島県民生児童委員協議会	2022 年 10 月～11 月(2 日間)
46.	津止　正敏	男たちよ、介護をしよう。	通販生活/株式会社カタログハウス	2022 年 11 月（41(4),4-11）
47.	岡本　直子	TFT（思考場療法）アルゴリズムレベル（初級）セミナー講師	立命館大学総合大阪茨木キャンパス	2022 年 5 月（2 日間）

６.. 受賞学術賞

No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
1.	村本　邦子	日本コミュニティ心理学会	日本コミュニティ心理学会 2022 年度奨励賞		2022 年 12 月
2.	サトウ　タツヤ	日本看護学教育学会	日本看護学教育学会第 32 回学術集会【優秀演題賞】発展部門	文化を創造する看護教員の力量形成プロセスの解明-複線径路等至性アプローチによる分析-	2022 年 8 月
3.	山浦　一保	公益社団法人日本心理学会	公益社団法人日本心理学会学術大会優秀発表賞	職場における妬み感情の緩和に向けた実証の試み －上司との関係性、感謝の気持ちで過ごす１週間の力は妬みの増幅を食い止める？－	2022 年 10 月
4.	山浦　一保	日本の人事部	第11回HRアワード2022 書籍部門入賞	書籍『武器としての組織心理学』	2022 年 8 月
5.	和田　有史	日本官能評価学会	2022 年大会優秀発表賞	食品の多様性が見た目のおいしさと感性満腹感に与える影響: チキンマックナゲット®を用いた検討	2022 年 11 月
6.	高橋　康介	映像情報メディア学会	2021 年ベストアーティクル賞	認知心理学における文化比較の再定義：日芬フィールド実験研究を通して	2022 年 4 月
7.	清家　理	Geriatric & Gerontology International	Best Article Award	Effectiveness of Group based Education for Informal Caregivers of People with Dementia in Japan: a randomized controlled study	2022 年 6 月
8.	泉　朋子	ヒューマンインタフェース学会	優秀プレゼンテーション賞		2022 年 9 月

７．科学研究費助成事業

No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1.	稲葉　光行	仮想空間を媒介とした日本文化に関する状況学習支援環境に関する総合的研究	基盤研究(B)	2020 年 4 月	2025 年 3 月	研究代表者
2.	稲葉　光行	看護研究における混合研究法教育用ガイドブックの開発と e ラーニングの構築	基盤研究(B)	2020 年 4 月	2025 年 3 月	研究分担者
3.	松田　亮三	多様化する社会における福祉体制の動態―日韓台比較研究を通した理論開発	基盤研究(B)	2020 年 4 月	2024 年 3 月	研究代表者
4.	岡田　まり	コンピテンシーに基づくスーパーバイザー養成プログラムのモデル構築	基盤研究(B)	2019 年 4 月	2024 年 3 月	研究代表者
5.	中村　正	脱刑事罰処理を支える「治療法学」の確立に向けた学融的総合的研究	基盤研究(A)	2019 年 4 月	2024 年 3 月	研究分担者
6.	斎藤　真緒	家族責任規範の構築・脱構築―多様化するケアラー支援のためのメタ分析	基盤研究(C)	2020 年 4 月	2023 年 3 月	研究代表者
7.	早川　岳人	ライフコースを通じた現代日本人のための循環器疾患発症予測ツールの開発	基盤研究(B)	2020 年 4 月	2023 年 3 月	分担研究者

8	山田　早紀	日本における取調べへの弁護人の立会いの運用可能性	若手研究	2019 年 4 月	2022 年 3 月	研究代表者
9.	若林　宏輔	取調べ録音・録画を用いた任意性判断に対して画像構成が与える影響について	基盤研究(C)	2019 年 4 月	2022 年 3 月	研究代表者
10.	矢藤　優子	女性の産後育児支援の多様性及び母子の well-being への影響の日中韓比較研究	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）(B)	2020 年 10 月	2025 年 3 月	代表
11.	矢藤　優子	親子の社会的関係性に関する胎児期からの縦断研究：子育て支援政策への提言をめざして	基盤研究(C)	2020 年 4 月	2023 年 3 月	代表
12.	北出　慶子	海外留学プログラムの効果検証：大規模パネルデータによる学生の心理特性の変化の分析	基盤研究(B)	2019 年 4 月	2023 年 3 月	研究分担者
13.	斎藤　進也	学術成果の発信のための仮想展示環境に関する研究	基盤研究(C)	2023 年 4 月	2026 年 3 月	研究代表者
14.	斎藤　進也	昭和期の映画館文化に関するノンフィルム資料アーカイブの構築	基盤研究(C)	2022 年 4 月	2025 年 3 月	研究分担者
15.	斎藤　進也	ゲーム芸術とアニメ芸術の倫理　社会的義務の記録と実装	挑戦的研究（萌芽）	2020 年 4 月	2024 年 3 月	研究分担者
16.	斎藤　進也	インタラクティブ CG 技術を用いた質的調査法の拡張に関する研究	基盤研究(C)	2022 年 4 月	2023 年 3 月	研究代表者
17.	山浦　一保	効果的な妬み緩和マネジメントに関する検討：多面的計測による介入対処策の提案	基盤研究(C)	2022 年 4 月	2024 年 3 月	研究代表者
18.	永井　聖剛	筋活動の強度と認知情報処理との相互作用	基盤研究(C)	2020 年 4 月	2023 年 3 月	研究代表者
19.	大谷　いづみ	生を辿り途を探す――身体×社会アーカイ ブの構築	基盤研究(A)	2021 年 4 月	2026 年 3 月	研究分担者
20.	大谷　いづみ	生命倫理学前史・成立史における安楽死論とキリスト教の相剋に関する米英日比較研究	基盤研究(C)	2019 年 4 月	2023 年 2 月	研究代表者
21.	川端　美季	近代日本における清潔規範の創出と展開	基盤研究(C)	2021 年 4 月	2024 年 3 月	
22.	古野　公紀	行動の形態と機能に関する実験的分析－形成と変容過程－	科学研究補助金若手研究(B)	2019 年 4 月	2023 年 3 月	
23.	高橋　康介	認知心理学における文化比較の再定義：日芬フィールド実験研究を通して	国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2020 年 4 月	2025 年 3 月	研究分担者
24.	高橋　康介	フィールドワークとフィールド実験によるホモルーデンス論の展開	基盤研究(B)	2020 年 4 月	2025 年 3 月	研究分担者
25.	高橋　康介	長期フィールドワークを可能とする心理・認知特性とメンタルスキルの解明	基盤研究(C)	2020 年 4 月	2023 年 3 月	研究代表者
26.	林　勇吾	Understanding E-Learning Features in Online Courses	基盤研究(C)	2022 年 4 月～	2025 年 3 月	研究分担者
27.	谷　晋二	言語的ルールが人の行動に及ぼす発達的、実験的研究	基盤研究(C)	2021 年 4 月～	2024 年 3 月	研究代表者
28.	泉　朋子	当事者意識を喚起する災害および避難に関する情報提示デザイン	基盤研究(C)	2020 年 4 月～	2023 年 3 月	研究代表者
29.	清家　理	認知症の人と家族ペアグループに対する多要素型心理社会的支援プログラム開発	基盤研究(C)	2022 年 4 月～	2027 年 3 月	研究代表者
30.	清家　理	厚生労働科研費：軽度認知障害の人における進行予防と精神心理的支援のための手引き作成と介入研究	科学研究費助成事業	2021 年 4 月～		研究分担者
31.	清家　理	AMED 認知症対策官民イノベーション実証基盤整備事業：MCI 及び認知症を有する人とその家族介護者へのグループ型同時介入プログラムの実現可能性検証	科学研究費助成事業	2019 年 6 月～	2023 年 3 月	研究分担者
32.	清家　理	認知症家族介護者の健康および介護環境に対するセルフコーピングの支援ツール開発	若手研究	2018 年 4 月～	2023 年 3 月	研究代表者
33.	西原　陽子	ネットいじめの防止を目的とした子どもの情報モラルの獲得を支援するシステム	基盤研究(C)	2020 年 4 月～	2022 年 3 月	研究代表者

34.	美馬　達哉	脳卒中超回復者の脳再構成を静的・動的磁場で誘発される脳波変調で解明する	新学術領域研究(研究領域提案型)	2022 年 4 月～	2024 年 3 月	研究代表者
35.	美馬　達哉	脳卒中者の機能再建を可能とするアンサンブル脳刺激法の創成	挑戦的研究(萌芽)	2021 年 7 月～	2023 年 3 月	研究代表者
36.	美馬　達哉	新規非侵襲的脳刺激が拓くネオ・リハビリテーションとそのシステム脳科学的解明	基盤研究(A)	2019 年 4 月～	2023 年 3 月	研究代表者
37.	美馬　達哉	静磁場暴露による低周波脳律動の誘導と関連領野との相互結合性の変化	基盤研究(B)	2019 年 4 月～	2023 年 3 月	研究分担者
38.	姫野　友紀子	生を辿り途を探す――身体×社会アーカイブの構築	基盤研究(A)	2021 年 7 月～	2026 年 3 月	研究分担者
39.	御旅屋　達	若者支援における総合相談窓口の設置・運用実態とその効果に関する研究	基盤研究(C)	2022 年 4 月～	2026 年 3 月	研究代表者
40.	斎藤　真緒	家族責任規範の構築・脱構築―多様化するケアラー支援のためのメタ分析	基盤研究(C)	2020 年 4 月～	2023 年 3 月	研究代表者
41.	木村　朝子	仮想物体への接触感を提示する先端伸縮型デバイスの研究	基盤研究(B)	2020 年 4 月～	2023 年 3 月	研究代表者
42.	松室　美紀	時空間映像データの高度利用のための循環型フレームワークの構築	基盤研究(B)	2021 年 4 月～	2025 年 3 月	研究分担者
43.	松室　美紀	仮想物体への接触感を提示する先端伸縮型デバイスの研究	基盤研究(B)	2020 年 4 月～	2024 年 3 月	研究分担者
44.	松室　美紀	仮想空間における身体変化の人間の知覚・行動への影響の検討	若手研究	2020 年 4 月～	2023 年 3 月	研究代表者

８．競争的資金等(科研費を除く)

No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
1.	林　勇吾	高齢者の認知的コミュニケーションの支援に向けた学際的研究拠点の形成	研究支援制度分類：R-GIRO 研究プログラム 種目：第 4 期拠点形成型 R-GIRO 研究プログラム	2021 年 4 月～	2026 年 3 月	
2.	早川　岳人	国民代表集団のコホート研究によるウイズ・コロナ時代の健康格差・健康寿命の規定要因の解明および健康調査のオンライン化の検討	厚生労働行政推進調査事業費補助金循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業	2022 年 4 月	2025 年 3 月	分担研究者
3.	矢藤　優子	コロナ禍前後における子育ての変化と支援の充実：感染拡大前からの 経時的調査の継続	日本心理学会	2021 年 8 月	2022 年 8 月	代表
4.	矢藤　優子	東アジア圏の家族観のもとでの科学的根拠に基づく育児・就労支援の構築	研究高度化推進制度 研究支援制度分類：アジア・日本研究推進プログラム	2021 年 4 月	2024 年 3 月	
5.	サトウ　タツヤ	ウェアラブルを利用したウェルビーイングアルゴリズム開発	受託研究	2022 年 10 月	2023 年 3 月	
6.	山浦　一保	高齢者の好奇心は認知ー身体機能をどこまで向上させられるか？：モデル地域・余呉に向けた共創の取り組み	2022 年度グラスルーツ実践支援制度	2022 年 10 月		
7.	林　勇吾	高齢者の認知的コミュニケーションの支援に向けた学際的研究拠点の形成	研究支援制度分類：R-GIRO 研究プログラム 種目：第 4 期拠点形成型 R-GIRO 研究プログラム	2021 年 4 月～	2026 年 3 月	
8.	清家　理	大阪ガス福祉財団：軽度認知障害および認知症の人と家族に対するレクリエーションアプローチによる心理社会的支援プログラム開発	大阪ガスグループ福祉財団「調査・研究助成」	2022 年 4 月～		代表
9.	岡本　直子	The effectiveness of music-based interventions on college students' stress management	競争的資金等の外部資金による研究 A research grant award by Mid Atlantic Region - American Music Therapy Association	2022 年 4 月	2023 年 3 月	研究分担者

９．知的財産権

No.	氏名	名称	出願人区分	発明人区分	出願番号	公開番号	登録（特許）番号	国

1.								